

# 会 報

事務局

北海道札幌月寒高等学校

〒062-0051

札幌市豊平区月寒東1条3丁目

TEL 011-851-3111

FAX 011-851-3112

## ~~~~~ 卷 頭 言 ~~~~~

### 「教育新時代に対応した定通教育の創造」

北海道高等学校教頭・副校長会定通部会長

北海道有朋高等学校副校長 山本周男

北海道高等学校教頭・副校長会定通部会の皆様には、日ごろより本部会の運営・諸事業の推進にご理解とご協力をいただき、深く感謝申し上げます。また、北海道教育委員会、北海道高等学校長協会定通部会をはじめ関係諸機関には、多大なるご支援とご指導を賜り心よりお礼申し上げます。

さて、全国高等学校定時制通信制教頭・副校長協会では、全体テーマを「教育新時代に対応した定通教育の創造」とし、①多様化した生徒に応じた定通教育の改善と充実、②勤労青少年の就学条件の改善及び就学の促進、③教職員の定数及び待遇改善の要望、④組織及び事業の充実と活性化、以上の4点を事業目標に掲げ各種事業に取り組んでいるところです。また、平成27年12月21日の中央教育審議会では、新しい時代の教育や地方創生の実現に向けた学校と地域の連携・協働の在り方と今後の推進方策について《社会を生き抜く力の養成》《未来への飛躍を実現する人材の養成》そして《学びのセーフティネットの構築》など、「教育再生」を実現するための3点の重点化があげられました。子供や社会の状況は大きく変化しています。また、働き方が多様化する中、社会に出た後も、誰もが学び続けることができ、その成果を社会で活かし、何歳になっても夢と志のために挑戦することや、一人ひとりが自己充実感を持って幸福に生きていくことができる社会を実現することが極めて重要となることが述べられています。そのために、学校現場では、○各学校における教育課程の編成、実施、評価、改善の一連のカリキュラム・マネジメントの普及、○「アクティブ・ラーニング」などの新たな学習・指導方法や、新しい学びに対応した教材や評価手法等の開発・普及など、変化の激しい時代を生きる生徒の将来のために具体的な動きが求められています。

本定通部会でもこのような全教協や文部科学省、北海道教育委員会の動きを受けながら、生徒一人ひとりの学びの充実、能力の開花、そして将来の幸せのために会員相互のネットワークを深め、定通教育に携わる者の使命を果たして行くことが大切と考えます。本定通部会が今後ますます「一体感をもった部会の活動」となりますようにご協力をお願いいたします。

終わりになりますが、第67回全国定時制・通信制高等学校教頭・副校長協会（全教協）研究大会が今年、平成28年7月28日（木）、29日（金）に当地、北海道で開催されます。大会の成功に向けて事務局を中心に鋭意準備を進めておりますが、本定通部会の皆様には5月、11月の2回の全道教頭・副校長会が開催される中、7月の全教協北海道大会への研究協議会でも運営協力をいただかなければなりません。全教協大会には運営者として多くの教頭先生方のご協力が必要です。北海道高等学校教頭・副校長会定通部会の総力をもって実り多い大会となるようにさらなるご理解とご協力をお願い申し上げます。この一年間の会員の皆様のご協力に感謝を申し上げ、巻頭の辞とさせていただきます。

## 「新たな時代の定時制・通信制教育の充実に向けて」

北海道高等学校長協会定通部会長  
北海道有朋高等学校長 宮田 日出夫

北海道高等学校教頭・副校長会定通部会の皆様には、日頃から本道定時制・通信制教育の充実・発展に多大なるご尽力をいただき、心より感謝申し上げます。

さて、昨年は、高校教育改革に大きな関心が集まりました。特に「高等学校基礎学力テスト」及び「大学入学希望者学力評価テスト」（いずれも仮称）をめぐる議論が活発でした。新テストは、高校と大学との接続の在り方を抜本的に変えて、高校教育と大学教育の質的な改革を目指すものです。変化の激しい 21 世紀の世界を見据え、これからの社会で生徒たちが自律的に生きるために必要な「真の学ぶ力」の育成を目指すものです。知識・技能の確実な習得を基に思考力や判断力、表現力を培い、主体性を持って多様な人々と協働し、課題の解決を目指す資質や能力の育成です。こうした議論と定通教育との間に、距離を感じた方がいるかも知れません。しかし、困難を抱えている生徒が多い定通教育だからこそ、「真の学ぶ力」を身に付けて社会に送り出す努力が大切ではないかと考えています。

改革をめぐる議論は、高校教育の質の確保・向上をベースに、高大接続テスト、新学習指導要領など多岐にわたります。その中で、経営的な観点で、留意すべき事項がありました。それは、一連の改革で、PDCA マネジメントサイクルを重視している点です。例えば、「高等学校教育における PDCA サイクルの構築」（高大接続システム改革会議）やアクティブラーニングによる指導と評価の改善でのカリキュラムマネジメント重視などです。

個人的な所感で恐縮ですが、PDCA サイクルと聞くと「凡事徹底」という言葉を思い出します。当たり前のことを徹底することの大切さ、裏を返すとその難しさです。PDCA サイクルは、知らない方がいないほどポピュラーです。しかしながら効果的に活用している学校は少ないと思います。当たり前だけど、徹底が難しいことの一つです。特に教育では、C (CHECK) と A (ACTION) が機能せず、「やりっぱなし」が多いと言われます。背景には、PDCA サイクルの意義や重要性への理解不足、P (目標設定) での検討不足・共通理解の不足、各プロセスでの情報収集の不十分さなどがあると指摘されています。要因等に触れる余裕はありませんが、今後の高校教育を充実させるため、PDCA サイクルを確実に機能させることが極めて重要かと思えます。「凡事徹底」という言葉のごとく、当たり前のことをしっかりと実行することが大切です。

終わりになりますが、今年 7 月末には第 67 回全国高等学校定時制通信制教頭・副校長協会教育研究協議会北海道大会が開催されます。定通教育が抱える諸課題の解決に向け、多様化した生徒の実態や学習ニーズに応える魅力と活力あふれる教育活動の創造に資することが期待されています。定通部会の皆様には、今後、開催に向けた準備、当日の運営等で多大なご負担をお願いすることになります。皆様の協力で本大会が成功裏に終わるとともに、大会を機に本道定通教育がより一層充実することを心から期待しています。

**平成27年度定通部会**  
**北海道高等学校教頭副校長会定通部会事務局**  
**北海道月寒高等学校 教頭 小林 孝**

日頃より事務局の活動に御協力と御理解を賜り、誠にありがとうございます。さて、本年度の事業計画に

つきましては、ほぼ当初の予定どおりに実施しております。これもひとえに会員の皆様の御支援の賜と感謝申し上げます。

平成27年度定通部会事業報告をもって、北海道高等学校教頭副校長会定通部会事務局からの報告とさせていただきます。

**平成27年度定通部会 事業報告**

● **北海道の事業報告**

| No. | 実施期日              | 事業及び会場  | 内容及び出席者                                 |
|-----|-------------------|---|---|
| 1   | 平成27年<br>5月20日(水) | ◆北海道高等学校教頭・副校長会定通部会<br>理事会・総会・研究協議会<br>(会場)ライフォート札幌 | 内 容：事業・会計報告、事業計画、予算案審議、<br>研究協議 出席者：48名 |
| 2   | 5月20日(水)          | ◆北海道高等学校定時制通信制体育連盟幹事会<br>(会場)ライフォート札幌               | 内 容：報告事項、事業計画・予算案、定通体連<br>運営協議 出席者：48名  |
| 3   | 6月1日(月)           | ◆北海道高等学校定時制通信制教育振興会総会・<br>研究協議会<br>(会場)ライフォート札幌     | 内 容：講演、研究協議<br>出席者：校長、教頭、給食調理員他 出席者：50名 |
| 4   | 10月9日(金)          | ◆第47回北海道高等学校給食研究協議会<br>理事総会・北海道大会<br>(会場)札幌琴似工業高等学校 | 内 容：講演、研究協議<br>出席者：36名                  |
| 5   | 10月20日(火)         | ◆第59回北海道高等学校定時制通信制生徒生活体験<br>発表大会<br>(会場)札幌市教育文化会館   | 内 容：生徒生活体験発表<br>出席者：生徒、引率者計 300名        |
| 6   | 平成28年<br>3月上旬     | ◆平成27年度調査研究報告書発行<br>◆「会報」発行(平成27年度調査研究報告書)          | 内 容：アンケート調査                             |

● **全国の事業報告**

| No. | 実施期日                 | 事業及び会場   | 内容及び出席者                                    |
|-----|----------------------|--|--|
| 1   | 5月7日(木)<br>～8日(金)    | ◆東北・北海道地区高等学校通信制教育研究会<br>校長並びに教頭・副校長研究協議会(会場)青森市           | 内 容：事業報告、事業計画、予算審議<br>出席者：有朋高校副校長 計1名      |
| 2   | 6月5日(金)              | ◆全国高等学校定時制通信制教頭・副校長協会<br>第1回全国常任理事研究協議会(全教協理事研)<br>(会場)東京都 | 内 容：全国大会提出議案審議、講演、研究協議<br>出席者：部会長、副部会長 計2名 |
| 3   | 6月11日(木)<br>～12日(金)  | ◆第67回全国高等学校通信制教育研究会総会並びに<br>研究協議会(全通研大会)(会場)石川県            | 内 容：総会、研究協議<br>出席者：有朋高校副校長 計1名             |
| 4   | 7月30日(木)<br>～31日(金)  | ◆第66回全国高等学校定時制通信制教頭・副校長<br>協会総会・教育研究協議会(全教協大会)<br>(会場)神戸市  | 内 容：理事会、総会、講演、研究発表<br>出席者：北海道会員 計10名       |
| 5   | 8月6日(木)<br>～7日(金)    | ◆第65回全国高等学校定時制通信制教育振興会<br>大会(全振大会)(会場)四日市市                 | 内 容：報告、講演、研究協議<br>出席者：有朋高校長、教頭ほか 計5名       |
| 6   | 8月10日(月)             | ◆全国高等学校給食研究協議会理事会・総会                                       | 内 容：理事会、総会、講演、研究発表<br>出席者：札幌琴似工校長 計1名      |
| 7   | 11月5日(木)<br>～6日(金)   | ◆東北・北海道地区高等学校通信制教育研究会総会<br>並びに研究協議会青森大会(地区通研大会)<br>(会場)秋田市 | 内 容：報告、講演、研究協議<br>出席者：有朋高教頭 1名             |
| 8   | 11月22日(日)            | ◆第63回全国高等学校定時制通信制生徒生活体験<br>発表大会<br>(会場)東京都                 | 内 容：生徒生活体験発表<br>出席者：生徒、引率者 計4名             |
| 9   | 12月5日(金)             | ◆全国高等学校定時制通信制教頭・副校長協会<br>第2回全国常任理事研究協議会(全教協理事研)<br>(会場)東京都 | 内 容：報告、平成27年度事業計画、研究協議<br>出席者：部会長、事務局長 計2名 |
| 10  | 12月10日(木)<br>～11日(金) | ◆東北・北海道地区高等学校通信制教育研究会<br>教頭・副校長研究協議会(会場)八戸市                | 内 容：報告、平成27年度事業計画、研究協議<br>出席者：有朋高教頭 1名     |

平成27年度第67回全国高等学校通信制  
教育研究大会石川大会・研究協議会報告  
北海道有朋高等学校 副校長 山本 周男

日時 平成27年6月11日(木)、12日(金)  
場所 石川県立地場産業振興センター  
指導助言 東京都教職員研修センター研修部  
教育開発課次世代リーダー育成道場  
指導員 村越和弘様  
進行 石川県立金沢泉丘高等学校  
教諭 奥谷達朗  
司会 宮城県美田園高等学校  
教頭 下田仁  
茨城県水戸南高等学校  
教頭 沼田律子  
記録 静岡県立静岡中央高等学校  
教諭 中川綾子  
静岡県立静岡中央高等学校  
教諭 鮎京正憲  
会場 岐阜県立華陽フロンティア高等学校  
教諭 山田きよみ  
岐阜県立華陽フロンティア高等学校  
教諭 西脇靖和  
石川県立金沢泉丘高等学校  
教諭 奥谷達朗  
石川県立金沢泉丘高等学校  
教諭 松本雅光  
参加者数 122名

研究テーマ

「杜陵高校宮古分室の取り組みと課題」

岩手県立杜陵高等学校 宮古分室

副校長 小山秀司

岩手県立杜陵高等学校 奥州校

副校長 晴山俊

「学校運営と学校行事」

栃木県立宇都宮高等学校

教頭 富永孝昭

東京都立一橋高等学校

副校長 小川孝

神奈川県立横浜修悠館高等学校

副校長 勝山雅法

I 実践研究発表

「杜陵高校宮古分室の取り組みと課題」

岩手県立杜陵高等学校 宮古分室

副校長 小山秀司

岩手県立杜陵高等学校 奥州校

副校長 晴山俊

1 学校概要

(1) 沿革等

盛岡市に所在する定時制課程と通信制課程（いずれも単位制）を併設した学校。

大正13年に全国で3番目に設立された私立夜間中学として始まり、現在は岩手県の定通教育のセンタースクールに位置づけられている。

平成26年に創立90周年を迎えた。

- ① 定通制高校として全国で初めて独立校舎をもった（昭和12年）
- ② 県の定通教育のセンタースクールとなった（昭和43年）
- ③ 学年制から単位制へ移行した（昭和63年）

(2) 生徒数、職員数

活動生：297名／在籍生1098名

受講率27.0%

盛岡本校：719名、

宮古分室：141

奥州校：238名、

その他盛岡少年刑務所（MJP）の受講生14名  
平均年齢

盛岡本校 22.0歳、

宮古分室 18.5歳、

奥州校 19.0歳

教職員数（管理職、事務職を含む）

盛岡本校 28名、

宮古分室 11名、

奥州校 12名

平均年齢

盛岡本校 51.4歳、

宮古分室 42.6歳、

奥州校 52.9歳

2 学習指導

(1) スクーリング

○盛岡本校・・・日曜日、月曜日、水曜日に通常スクーリング。日曜日はNHK学園にも対応。同一週内での授業科目は3日間同一。非常勤科目の月水はビデオによる。木曜日に旧カリに対応した授業を開設。

○宮古分室・・・日曜日、水曜日、木曜日にスクーリング。水、木は三修制の科目を開講。個別指導の科目について水、木に指導。

○奥州校・・・日曜日、水曜日、金曜日にスクーリング。水、金は三修制の科目を開講。

※文科省が定める各教科の1単位あたりの面接指導時間数の標準が1時間となっている教科・科目についても規程時数2～3時間として運用する。

※観点別学習状況評価を県全体で平成28年度完全実施する。

(2) 特色のある学校行事・取組

① 「合同運動会」の実施（10月）

本校、分室、分校、NHK学園の生徒が盛岡本

校に集まり合同運動会を実施。保護者による豚汁の炊き出しも好評（本校・分室・分校は各90km程度の距離）。被災地支援の活動も生徒会執行部を中心に行われる。

②生徒生活体験発表会

生徒全員に取り組ませている。

（総合的な学習の時間を活用 宮古分室）

平成18年度から6年連続岩手県大会で優勝し、全国大会に出場

4月 生活体験作文の書き方の指導  
（受講生全員）

6月 総合的な学習の時間 過去の大会映像で生徒生活体験発表会の内容を見せる。

作文の提出（全員）←発表まで4回は書き直しの指導を行う。

7月 校内 生徒生活体験発表会  
卒業予定者が発表

校内優勝者は県大会へ

県大会1位になると11月の全国大会へ

校内準優勝者は東北・北海道地区通信制生徒生活体験発表大会へ

地区1位になると11月の全国大会へ

※不登校経験者が多く、自分のことを人前で発表することが苦手な生徒が多い。「発表会にも出たくない」と言っている生徒も最後には発表し卒業して行く。生活体験発表により自分のことを他者にアピールできるようになっていく。将来の進路決定力に大きく影響している。

(3) 入学、卒業等

①入学者選抜

|      | 4月   | 6月 | 9月   | 3月   |
|------|------|----|------|------|
| 盛岡本校 | 一般編入 | 転入 |      | 転入編入 |
| 奥州校  | 一般編入 |    | 転入編入 | 転入   |

②在籍可能な年数

入学後15年経過した生徒は除籍する。

3 特別な支援についての取組

多くの生徒が何らかの障がいや疾病、もしくは類似する社会的な課題を抱えているという実態から「生徒一人一人の困り感を少なくする」ために特別支援教育を推進。

平成22年度から「杜凌高等学校通信制地域連携ネットワーク会議」を開催し、各関係機関から指導・助言を受けている。会議は年2回（6月と12月）

4 その他

防災について、「COCOメール」で安否確認している。

II 「『学校運営と学校行事』全通研平成26年度学校運営に係る調査から」

1 はじめに

教育を取り巻く社会状況の変化

○ライフスタイル・価値観の多様化、少子化の進行

○いじめ・不当校・発達障がい等の課題の顕在化

○長期の経済停滞と「子どもの貧困」問題

これらを受けて

通信制高校では

○社会の変化・ニーズに柔軟な対応が可能な教育サービスとして認知→現状に即した変革の進行

○地域ごとに特色ある通信制課程（学校）が誕生

※通信制の可能性を生かして

ニーズへの対応だけでなくシーズ志向の改革を！



「出来ないからやらせない」のでは無く「やらせないから出来ない」という発想！

やらせないことは生徒の自学自習、自主性の尊重では無く、教員の力量と意欲、本気度の違い。生徒のやる気の掘り起こし、生徒の心に火をつける教師が通信制こそ必要。生徒が出来ないことを生徒のせいにしては教職という仕事は存在しない。

2 最近の動向

○通信制高校の形態は、公立、私立、単独、併置、広域、狭域など様々

○1都道府県での設置数が少なく他校での実践、課題などの共有が難しい

これらを受けて

○スクーリングのライブ中継

○遠隔教育

○多様な生徒に対応する様々な手法による人材育成

3 各校の取組

(1) 神奈川県立横浜修悠館高等学校

○スクーリング設定日は日・月・火・水・木の週5日間である。

「日曜・IT講座」のための日曜スクーリングと「平日登校講座」のための平日スクーリング（週4日）に分かれており、それぞれ

独立したスケジュールで開催されている。時間割は1日当たり最大7時限まで。1つの科目にそれぞれ「日曜・IT講座」と「平日登校講座」が設定されており、生徒は科目ごとに選択できるため、組み合わせによっては週5日間登校することもある。スクーリングはすべての曜日が年間24日設定されており、「平日登校講座」では、レポートをスクーリングの中で完成させることでできるような回数を多く設定している（1週当たり2～3回のスクーリング設定）。

- 「日曜・IT講座」は仕事が忙しい、体調不良や入院、対人関係（集団の中で疲れてしまう）など登校回数を減らしたい生徒のため、「平日登校講座」は自力では学習が進まない生徒のために時間をかけた指導をしようと考えられた。
  - 「平日登校講座」ではスクーリング時間割が年間を通じて固定されているので、生活のリズムを作りやすい。
  - 「日曜・IT講座」と「平日登校講座」とも、年間の最低必要スクーリング回数に違いはなく規程どおりである。
  - 「平日登校講座」には補習講座を時間割に組み込んだ「レポート完成講座」や個別指導の「トライ教室」など支援がある。
- (2) 千葉県立千葉大宮高等学校
- スクーリングの設定日は日・月・火・木の各曜日（日・月・火は同一時間割）各曜日年間16回で1回あたり6時間。
  - 木曜は基礎学力の向上を目指す内容で年間20回。
- (3) 山形県立霞城学園高等学校
- スクーリングの設定日は日・水の各曜日
  - 日曜日が主たるスクーリング実施日（年間20回）。
  - 水曜日は、技能連携校（年間15回）でのスクーリングのほか、補充スクーリング（年間15回）を設定している（合計30回）。
  - 木・金は支部共同学習を実施  
山形市（木曜日に30回）、新庄地区・米沢地区・長井地区・寒河江地区（金曜日に1回2地区ずつ44回）夜6時から開始。テスト受験もこのときに可能。

### Ⅲ 分科会のまとめと指導助言から

- 従来の通信制システムは、現在の生徒の多様性や時代の変化に向けて想定したものでは無かった。
- 生徒や時代の変化に対して学校が変化していない。  
通信教育の在り方を考え直さなければいけない時期を迎えている。
- スクーリング＝レポート作成という通信制のシステムのこだわりはいかがなものか、自問自答している。
- 課題のない生徒はどこにもいない。様々な可能性を持つ生徒として社会で人の中で生きて行ける力をつけてやるのが高校の大きな使命である。
- 教師が変わらなければ、変化し続ける社会で生きる生徒を指導することはできない。
- 杜陵高校の生活体験発表会の取組は秀逸である。指導すべきことはしっかり指導して、成功体験に導き、それが伝統となり生徒の自己肯定感や生きる力を育てている。

#### 全国高等学校給食研究協議会ブロック会議総会・ 全国大会報告

北海道札幌琴似工業高等学校 教頭 北川 能貴

平成27年8月10日（月）に平成27年度全国高等学校給食研究協議会総会・講演会が東京都学校給食会館において開催されました。北海道ブロックからは北海道札幌琴似工業高等学校長の白野勝義北海道高等学校給食研究協議会会長が出席しました。

#### 1 ブロック会議

平成26年度のブロック会議において、北海道・東北ブロックを構成する本道と山形県で今後のブロック内の役割分担を確認していましたが、山形県が平成26年度末をもって退会したため、今年度から北海道・東北ブロックは本道のみとなりました。今後のブロック選出全国役員等は北海道高等学校給食研究協議会内で検討し、了承は得られましたが、全国組織の在り方など課題が見受けられました。

#### 2 総会

##### (1) 平成26年度会務報告

平成26年度会計決算  
平成27年度役員改選  
平成27年度事業目標  
平成27年度会計予算

##### (2) 今後の運営について（申し合わせ事項）

- ・全国組織から退会している県も多く、ブロック毎に構成県数に差があるが、ブロックの再編はしない。
- ・全国大会は隔年度に東京都で開催する。

- ・平成28年度は理事会・総会および全国大会を8月に二日日程で行う予定

### 3 講演会

講師 エンゼルフーズ株式会社  
代表取締役社長 古賀 義将 氏  
演題 「和食回帰」～米飯食のすすめ～

### 4 その他

平成28年度北海道・東北ブロック選出役員(案)  
・ブロック選出副会長 札幌工業高校長  
常任理事 札幌工業高校教頭  
・北海道選出代表 札幌工業高校長  
・北海道選出理事 札幌北高校教頭

**平成27年度第66回全国高等学校定時制通信制教頭・副校長会協会教育研究協議会兵庫大会報告**  
**北海道高等学校教頭・副校長会定通部会事務局長 北海道札幌月寒高等学校教頭 小林 孝**

標記の大会につきまして、次のとおり御報告いたします。

□期 日 平成27年7月30日(木)  
～31日(金)

□会 場 神戸市

□参加者 255名(北海道支部から10名)

#### ◆全国理事会・総会

主催者を代表して山西和夫 全国高等学校定時制通信制教頭・副校長協会理事長(東京都立桜町高等学校副校長)から、また開催支部を代表して池本太三 兵庫大会実行委員長(兵庫県立阪神昆陽高等学校教頭)から挨拶がありました。

来賓として野中繁 全国定時制通信制高等学校長会理事長(東京都立砂川高等学校校長)から挨拶があり、議事、感謝状贈呈が行われました。

#### ◆開会式

開会式では、次の方々から祝辞をいただき、2日間にわたる大会が開会されました。

高見英樹 文部科学省初等中等教育局教育企画課教育制度改革室専門官

松澤浩二 厚生労働省職業能力開発局育成支援課キャリア形成支援室室長補佐

徳重 隆 公益財団法人全国高等学校定時制通信制教育振興会事務局長

野中 繁 全国定時制通信制高等学校長会理事長

上代真澄 全国高等学校通信制教育研究会会長

石澤精三 公益財団法人石澤奨学会理事長

高井芳朗 兵庫県教育長

#### ◆講演

「頑張れることへの感謝」と題してプロゴルファー古市忠夫氏による講演がありました。

#### ◆研究協議会・分科会

##### ◇第1分科会〈教育課程〉

「年間行事計画の編成上の課題と副校長の役割について」東京都立農芸高等学校 佐々木一憲副校長、「ICT機器を用いた教育指導の工夫～理数系科目での実践紹介」島根県立浜田高等学校通信制課程 長野宏教頭

##### ◇第2分科会〈生徒指導〉

「積極的生徒指導体制の確立をめざして」北海道釧路湖陵高等学校 矢橋佳之教頭、「社会活動の取組みから見えてくる生徒の変容と生徒指導」宮城県石巻北高等学校飯野川分校 武田元彦副校長

##### ◇第3分科会〈管理運営〉

「保護者等との有効な連携と地域への情報発信」岐阜県立中津高等学校 中嶋俊朗副校長、「定時制高校の組織化のために～評価システムの再構築と校内研修の活性化～」栃木県立矢板東高等学校 植木 淳教頭

##### ◇第4分科会〈教育制度・単位制〉

「本校単位制の課題と新たな試み」新潟県立明鏡高等学校 横尾則幸教頭、「生涯学習との関わりと将来像～本校のキャリア教育について～」徳島県立名西高等学校 橋見誠一教頭、「定時制課程における単位制の課題とその改善策」佐賀県立鳥栖工業高等学校 原岡秀直教頭

##### ◇第5分科会〈通信教育〉

「生徒の実態に応じた通信制教育の取組」岡山県立岡山操山高等学校通信制課程 吉規秀明教頭、「群馬県の公立高校通信制の現状と課題について」群馬県立高崎高等学校通信制課程 飯塚 聡教頭

#### ◆研究協議会・全体会

各分科会の報告者が研究発表及び協議内容について報告し、助言者が全体講評を行いました。

#### ◆閉会式

次期開催地の北海道支部より小林 孝(北海道札幌月寒高等学校教頭)が北海道大会の準備状況を報告し、全日程を終了しました。

終わりになりますが、北海道支部を代表して研究発表を担当された北海道釧路湖陵高等学校 矢橋佳之教頭(現、北海道札幌英藍高等学校教頭)には心より感謝申し上げます。

★全国定通教頭・副校長協会教育研究協議会  
参加報告  
第2分科会研究発表  
北海道釧路湖陵高等学校  
(現 北海道札幌英藍高等学校)  
教頭 矢橋 佳之

平成27年度第66回全国高等学校定時制通信制教頭・副校長協会教育研究協議会が兵庫県神戸市で開催され、第2分科会 生徒指導で研究発表の機会をいただきました。教頭1年目のつたない経験をどのようにまとめればよいのか皆目見当もつかない中、ご指導いただいた釧路湖陵高校宮下校長先生や有朋高校山本副校長先生、議長を務められた札幌月寒高校小林教頭先生をはじめ、定通部会の皆様のおかげで何とか大役を果たすことができました。心から感謝申し上げます。来年度の全教協が北海道開催となる関係で、多くの先生たちと神戸を訪れ、北海道大会への準備とアピールをして参りました。全教協北海道大会の成功を願っています。

◆研究協議 第2分科会 生徒指導

「積極的生徒指導体制の確立をめざして」

◆助言者

兵庫県立西宮香風高等学校長 河内 孝夫 様  
兵庫県立尼崎市立琴ノ浦・城内高等学校長  
長谷川 宏 様

◆発表者

北海道釧路湖陵高等学校教頭 矢橋 佳之

【発表の概要】

1 定時制はもう不要なのか？

平成23年度まで8,9割の定員充足率が平成24年度から4,5割程度に下落。管内中卒者の減少よりも激しい減少率となっている。

かつての定時制は「働きながら学べる学校」だった。平成19年度までは過年度生中心となり、荒れた学校になっていった。平成20年度以降不登校経験者が増加。平成25年度以降は何らかの支援が必要な生徒が中心となり、荒れはおさまった。だが、「荒れていない学校」はゴールではない。「積極的に選ばれる定時制」になるために「ゆっくりと、しかし、確実に成長できる学校」の実現をめざす必要がある。

2 新しい存在価値の具現化に向けて

これまでは、悪をつぶす対症療法的な「消極的生徒指導」が中心の疲弊した“不毛の地”。これからは善を伸ばす予防開発的な「積極的生徒指導」を中心とした生徒が確実に育つ“肥沃な大地”にしたい。

3 教頭として始めたこと

トップダウンではなく、率先垂範と「Let's」の姿勢で学校改善の喜びを共有したい。まずは、1週間の皆勤チャレンジ「湖定出席ラリー」を導入した。

4 みんなが主役の校風づくり

生徒の抱える困難さをも個性として許容しあえる温かい校風づくりをめざす。生徒のやる気を引き出し、ワクワクいっぱい为学校にするため、教員が学校を盛り上げることに楽しそうにしている姿を見せる。学校祭で同窓生とオリジナルソング「この丘で…」を復活。OB劇団「オールドボーイズ」の結成。これらの報道で生徒に自信と誇りを持たせる。

今年度は、部活動の活性化に取り組んだ。加入率が10%向上し、40%に到達。学校活性化に向けた片鱗が現れ始める。

5 成長へのシステムづくり

「確実に成長する学校」を実現するためのシステムづくりを進めた。(1)学び直しによるわかりやすい授業の構築を進めた。研究指定校を活用し、数学におけるTTを実施。基礎計算力とともに、学習意欲が向上した。(2)つまずきの段階からの支援を進めた。進路指導以前の段階につまずきがみられ、人間関係形成能力の向上をめざす心理的アプローチと生活能力の向上をめざす試みを導入した。(3)成長カルテシステムを導入した。全生徒の個別指導計画をめざし、全教職員で生徒の微細な変化を共有する。定着には労力に見合う効果が必要である。また、定時制には福祉的な面で困難さを抱えた生徒も少なくない。(4)福祉的な観点を充実させ、総合的な支援体制を構築しようとしている。

6 「明るく風通しのよい職場へ」

教職員の意識改革へ向けた旗振り役、諸機関との連携推進のパイプ役としての教頭の役割は大きい。満足感・達成感のあふれる“真の明るく風通しのよい職場”づくりをめざしている。

【指導・助言】

校内におけるあらゆる「資源」(人的・物的)をしっかり「資源」と捉え、最大限に活用している。(2)教師の負担感を軽減するための配慮を目に見えるように行っている。(3)生徒のためにかけている「手間」が確実に役立っている。(4)成長カルテシステムのようにデジタル化(見える化)したものをさらに活用するためには、特徴づけたり、統計化したりとより良いものになるのではないかと。



**第66回全国高等学校定時制通信制  
教育振興会大会  
研究協議会（三重大会）参加報告  
北海道札幌北高等学校 教頭 古谷 尚**

第66回全国高等学校定時制通信制教育振興会大会・研究協議会が平成27年8月6日（木）7日（金）の2日間の日程で、三重県四日市市のプラトンホテル四日市で開催されました。

今大会のテーマは「三重の地から定通教育の新たな方向と可能性を発信する」という内容で全国各地から250名が集まり、有意義な研究協議と情報交換が行われました。

大会1日目は、午前中に行われた理事会・評議員会、各県代表者会議に続き、午後からは島村宜伸会長の挨拶をはじめとした開会式が行われ、その後の総会では、平成26年度会務報告・事業報告と平成27年度事業目標・事業計画の報告がありました。

総会後の記念講演会では、三重大学副学長の西村訓弘氏から「これからの社会における人材育成について」というテーマで講話がありました。農業からみた生徒を生かす方法について大学と高校の高大連携による具体的な取組を紹介され、これからの社会では今までと違うスペックを持った生徒が活躍できる可能性があるといった興味深いお話がありました。生徒に感じさせ、体験させることを重視し、成就感や自己肯定感を育て、社会に送り出すことが高等学校教育では大切だと改めて感じました。

研究協議では「定通教育に求められるニーズの多様化とこれからの支援のありかた」について4校の先進的な取組が紹介され、大変参考になりました。



大会2日目は、文部科学省初等中等教育局の長尾篤志視学官から①特別支援や教育相談の充実②学力の保証③進路の保証④スマートフォンの調査・分析⑤考えさせる指導法への転換という5つの視点から指導助言をいただきました。

全国動向を知るうえで貴重な体験となりました。ありがとうございました。

**第63回全国高等学校定時制通信制  
生徒生活体験発表大会参加報告  
北海道札幌工業高等学校 教頭 柿原 幸一**

平成27年11月22日（日）、東京都港区の六本木ヒルズを会場に第63回全国高等学校定時制通信制生徒生活体験発表大会が開催されました。

北海道からは本校機械科3年の村岡錬磨君と留寿都高等学校定時制3年の齋藤優花さんの2名が出場し、それぞれ特別賞を受賞しました。

この大会は、全国の定時制・通信制高等学校に学ぶ生徒が、学校生活を通じて、感じ、学んだ貴重な体験を発表し、多くの人々に感動と励ましを与えることを目的として毎年開催されている歴史のある大会です。参加者は各都道府県の定時制・通信制生徒が1名ずつ（但し、北海道・東京・愛知・大阪は各2名）、計58名で行われます。午前中は、会場別発表会で5会場に分かれて発表し、各会場から3名を選出します。午後から15名で全体発表会で再度発表を行います。

村岡君は「挫折から希望」と題して、本校定時制へ入学してからの体験を発表。定時制の生活になじめず、次第に生活リズムが乱れて、徐々に朝起きるのが遅くなっていく。その後、両親に勧められて父の会社で働くことになり、生活の立て直しを始める。どんなに辛くても、父が勤めている会社なので逃げ出すわけにはいかない。生活の中心に仕事を置き、仕事に慣れるように頑張る。その後、徐々に学校との両立ができるようになっていく。学校では、生徒会に誘われ不安はあったが副会長を引き受ける。甘くはなく、仕事も多く大変。会長をサポートするべき立場が、逆にいつもサポートしてもらう。一年がたち、次の生徒会長に頼まれる。やろうと思っていたことができなったり、やり始めたけれど、上手くいかなかったり。それでも、周りで見守ってくれている人たちがいる。「これからは周りの人たちの背中をさりげなく押してあげられるような人になって、身近な、そして大切な人たちと一緒に歩んでいきたい。」と結んだ。

上位入賞者はNHK第2ラジオ放送で全文が紹介されました。

## ★地区だより

### 北海道高等学校教頭・副校長会定通部会 道南地区長

北海道函館中部高等学校 教頭 宮本 幸紀

#### (1) 道南地区の概況

道南地区の定時制高校は、函館市内に函館中部、函館工業、函館商業の3校がある。いずれも創立から100年前後の伝統校であり、道南地域の勤労青少年や全日制課程からの転・編入学する生徒、過去に高校教育を受けることができなかった方など多様な入学動機や学習歴を持つ生徒の教育の場としての役割を担っている。

また、函館市高等学校定時制教育振興会の支援をいただきながら、3校が連携・協力して、定体連、生活体験発表大会をはじめ、薬物乱用防止や性教育を目的とした生徒向けの合同講演会や、喫緊の教育課題解決のための指導力向上を目的とした教員対象の合同研修会を行っている。



#### (2) 北海道函館中部高等学校

大正12年6月1日に札幌(現札幌西高校)、旭川(現旭川東高校)、小樽(現小樽潮陵高校)などの中等夜学校の1つとして、北海道庁立函館中学校に併置を認可された。同年6月20日に第1回の入学生150名を迎えて、私立函館中等夜学校として開校式を挙げて以来、校名変更など幾多の変遷を経て、昭和25年から北海道函館中部高等学校定時制として体制を整え、向学心に燃える勤労青少年の学舎として、今日まで函館工業・函館商業と共に、夜学の灯火を点し続けてきた。卒業生は、平成26年度まで4,721名となり、全国各地で活躍している。中部高校の象徴、白楊(ポプラ)に集い、燈の中で学ぶ定時制の心意気を「楊燈魂(ようとうだましい)」と呼ぶようになり、その「楊燈魂」の名の下に教師と生徒が一丸となって、生き生きと学ぶ魅力ある学校づくりを目指している。

現在、道教委の「高校生ステップアップ・プロ

グラム」及び「いじめ未然防止モデルプログラム」指定校として、高等学校における問題行動やいじめ等の未然防止のため、予防的・開発的な視点に基づく生徒の人間関係形成能力やコミュニケーション能力の育成を図る取組の実践に努めている。生徒の日常生活等への満足度、精神的な安定度など、生徒をより深く理解するために「子ども理解支援ツール『ほっと』」を年3回実施し、生徒全員との教育相談や構成的グループ・エンカウンターを実施するための基礎資料として活用している。

また、基礎的・基本的な学習内容の定着を図り、主体的・能動的に学習する態度の育成や学習意欲を高めるための授業改善に努め、社会に飛び出す勇気と力をもつ生徒の育成に努めている。

#### (3) 北海道函館工業高等学校

本校は明治44年に設置され、平成23年に創立100周年を迎えた道内の工業高校としては最も古い歴史と伝統のある学校である。建築科の募集停止に伴い、平成28年度は機械科・電気科2学科の募集となるが、道南地区唯一の定時制工業高校として地域からの期待は高い。これまでに、1万余名の卒業生が巣立ち、地元函館を中心に全道・全国の産業界で活躍している。

生徒は明るく素直で、上級生・下級生問わず大変仲がよい。放課後や長期休業中に実施する資格取得に向けた講習には多くの生徒が参加し、危険物取扱者や電気工事士等の資格を取得している。より難易度の高い資格に挑戦する生徒も現れるようになり、互いに切磋琢磨する姿は学校全体に良い影響を与えている。また、部活動においても懸命に練習に励む生徒が増え、全道大会で上位入賞を果たすなど、結果を残す部が増えており、生徒は自信を深めている。

保護者は、学校の教育活動に深い理解を示し、定体連前の炊き出しによる激励会や学校祭における模擬店などのPTA活動に大変協力的である。



教職員は「わかる授業」を心掛け、授業形態や

指導内容・指導方法の工夫・改善に取り組んでいる。

また、生徒の登下校時には全ての教員が交代で玄関に立ち、生徒一人ひとりに声掛けをおこなうなど、常に生徒たちの話に耳を傾け、生徒との心のつながりを大切にしている。



#### (4) 北海道函館商業高等学校

本校定時制は明治36年4月15日、庁立函館商業学校第5代校長神山和雄、個人にて同校舎の一部を北海道庁より借り受け私立函館商業補習学校を開設し、夜間補習教育を行ったことが起源である。校名は函館商工実修学校、函館市立商工青年学校、函館市立商業学校、函館商業高等学校定時制課程と改称され、校舎は函館市の西部地区（函館山方面）から、五稜郭町（現在の函館美術館あたり）、昭和へと移転している。卒業生は、5,181名である。

平成25年に創立110周年を終え、記念事業の一つとして校舎周辺に芝桜を植栽し、地域住民からも芝桜ロードと称されて親しまれている。シルクロードに倣い、先人の想いをこの校舎に運び、友が行き来するように願いが込められている。

また、学校は文部科学省の研究指定事業を受け、21世紀の時代に生きるための力を「アクティブラーニング」による学習を通して身に付けさせようとしている。

さらに、生徒による商品開発では「GOPA」と名付けた青森産のゴボウの粉と北海道の小麦粉で作ったゴボウパスタを商品化し、各種イベントで販売し講評を得ている。特に平成26年度フードグランプリ（岐阜県で開催）準優勝に輝く審査員特別賞を受賞し、函館や東京のイタリアンの店でもメニューとして取り上げてくれた。

部活動では、サッカー同好会が発足し、全校から応援選手を募り、大会で初勝利を挙げることができた。全校応援では、学校が一つにまとまることができた。生活体験発表大会では、発表の他に本校音楽部が演奏を行い、彩りを添えている。

### ★地区だより

北海道高等学校教頭・副校長会定通部会

オホーツク地区長

北海道北見北斗高等学校 教頭 木村 成一

#### (1) オホーツク支部の概況

北海道高等学校教頭・副校長会定通部会オホーツク支部は、夜間定時制の網走南ヶ丘高校・遠軽高校・北見北斗高校と昼間定時制の東藻琴高校の4校で構成されている。今年度も5月に「定通体連支部大会」、10月に「生活体験発表大会」、11月には本支部が独自で行っている運動部の練習試合「部活動交流大会」が開催された。また、9月には「オホーツク管内高等学校定時制教育研究協議会総会・研究大会」が『生徒・地域の実態を踏まえ、生き生きとした魅力ある学校づくりを推進するにはどう取り組むか』を研究主題として開催された。

#### (2) 定通体連オホーツク支部大会

今年度の定通体連オホーツク支部大会は5月30日（土）に遠軽高校を当番校として遠軽町総合体育館及び遠軽高校体育館を会場に卓球・バドミントン・バスケットボールの3種目の競技が行われた。結果は、次のとおりである。

##### 【バドミントン】

|      |     |              |
|------|-----|--------------|
| 団体男子 | 優勝  | 網走南ヶ丘高校      |
|      | 準優勝 | 東藻琴高校        |
|      | 3位  | 北見北斗高校       |
| 団体女子 | 優勝  | 東藻琴高校        |
|      | 準優勝 | 北見北斗高校       |
| 個人男子 | 優勝  | 阪口 滉輔(北見北斗)  |
|      | 準優勝 | 佐々木 涼(網走南ヶ丘) |
|      | 3位  | 平村 凌(東藻琴)    |
| 個人女子 | 優勝  | 佐藤 瑞希(東藻琴)   |
|      | 準優勝 | 藤生 結衣(東藻琴)   |
|      | 3位  | 後藤 唯(網走南ヶ丘)  |

##### 【卓球】

|      |     |              |
|------|-----|--------------|
| 団体男子 | 優勝  | 遠軽高校         |
|      | 準優勝 | 網走南ヶ丘高校      |
|      | 3位  | 東藻琴高校        |
| 個人男子 | 優勝  | 青山幸太郎(北見北斗)  |
|      | 準優勝 | 福本 剛(遠軽)     |
|      | 3位  | 佐々木 誠(遠軽)    |
|      |     | 上野 翼(網走南ヶ丘)  |
| 個人女子 | 優勝  | 斉藤 美帆(東藻琴)   |
|      | 準優勝 | 中村 知香(網走南ヶ丘) |
|      | 3位  | 山田 杏珠(網走南ヶ丘) |
|      |     | 中山 颯希(遠軽)    |

## 【バスケットボール】

団体男子 優勝 東藻琴高校  
準優勝 北見北斗高校  
3 位 遠軽高校

全道大会へは各種目団体1チーム、個人はバド



ミントン上位3名、卓球は上位4名が出場した。また、全道大会を勝ち抜け、東京の駒沢体育館で行われた定通体連全国大会に卓球男子個人で青山君(北斗)と福本君(遠軽)、女子個人で斉藤さん(東藻琴)の3名が北海道代表として出場した。

### (3) 定時制通信制生徒生活体験発表大会

オホーツク管内定時制通信制生徒生活体験発表大会は9月5日(土)に網走南ヶ丘高校を当番校として網走南ヶ丘高校体育館を会場にそれぞれの学校での予選を勝ち抜いた4校10名の生徒が出場し、自らの学校や社会での体験を熱く語った。

結果は次のとおりである。

優勝 中村 知香(網走南ヶ丘高校 3年)  
準優勝 佐藤 瑞希(東藻琴高校 3年)  
3 位 山本 拓真(網走南ヶ丘高校 1年)

### (4) オホーツク管内高等学校定時制教育研究協議会総会・研究大会

今年度は北見北斗高校を事務局校(当番校)として、9月24日(木)に北見北斗高校視聴覚教室を会場に開催された。総会では平成26年度事業報告、会計決算報告及び監査報告がなされた。また、引き続き平成27年度事業計画案、会計予算案と定教研支部会則及び定通体連支部規約の改正が審議されそれぞれが承認された。総会に続き、研究協議会では研究主題の『生徒・地域の実態を踏まえ、生き生きとした魅力ある学校づくりを推進するにはどう取り組むか』のもと、生活指導では「生徒一人ひとりの存在感や自己実現の喜びを体験させるための指導法はどうあるべきか」を小主題として東藻琴高校の齋藤嘉高教諭が自校での生徒理解支援ツールの活用事例や教育相談体

制についての研究発表を、学習指導では「自ら学ぶ意欲を育て、学ぶことの楽しさや充実感を体得させるための指導法はどうあるべきか」を小主題として網走南ヶ丘高校の三澤史明教諭が総合的な学習の時間でのピア・サポートプログラムを利用した計画的な指導の実践事例に係る研究発表を行った。発表の後、各校の現状と課題や教育活動の取組状況について熱心に情報交換がされた。

## ★地区だより

北海道高等学校教頭・副校長会定通部会  
胆振地区長

北海道苫小牧東高等学校 教頭 西方 英幸

### (1) 胆振地区の概況

胆振地区の定時制は東地区に苫小牧東高校・苫小牧工業高校の2校と西地区に室蘭栄高校1校の3校で運営されており、5月に地区定体連大会、9月に生活体験発表大会、が行われている。苫小牧地区には苫小牧市定時制通信制教育振興会があり、5月の総会后、様々な場面で生徒たちの活動をサポートしていただき、定体連参加生徒の支援や両校共通の中学生向け学校パンフレット・地区生活体験発表大会文集・会報等の発行、卒業生徒の表彰など大きな役割を担っている。

### (2) 胆振地区定体連大会

5月30日に室蘭栄高校を当番校として3校参加でバスケットボール大会が行われ、優勝苫小牧工業高校、準優勝苫小牧東高校の2校が全道大会に進出しました。しかしながら、バドミントン・卓球・野球については、苫小牧工業高校のみの参加となり、部活動離れ、生徒数の減少等、今後の課題も見えてきています。そのような中、女子卓球の苫小牧工業高校内山さんが全道大会で優勝し、2年連続で全国大会に出場するなど輝かしい成績を残しました。

### (3) 平成27年度胆振地区高等学校定時制通信制生徒生活体験発表大会

主催

北海道高等学校長協会定通部会胆振支部

後援

北海道新聞室蘭支社・室蘭民報社・NHK 室蘭放送局・室蘭市教育委員会・

北海道室蘭栄高等学校定時制教育振興会

審査員

北海道教育庁胆振教育局教育支援課高等学校教育指導班主査 高田安利

北海道新聞室蘭支社報道部長 高山昌行  
室蘭民報社取締役編集局長 高木 忍  
NHK 室蘭放送局副局長 田中直宏  
北海道室蘭栄高等学校定時制教育振興会長 松本誠二

9月18日に室蘭栄高校を当番校として行われ、校内選考を通過した各校2名の計6名が自らの体験を基に熱い思いを熱弁しました。

最優秀賞は苫小牧工業高等学校3年佐藤涼くん、優秀賞苫小牧東高等学校3年石田玲奈さん、苫小牧工業高等学校1年野村茉由さんが受賞しました。最優秀賞の佐藤くんは全道大会に出場しました。



#### (4) 北海道室蘭栄高等学校

本校定時制課程は平成30年に70周年を迎えます。室蘭市内のほか、伊達市・登別市・白老町から通学している55名の在校生は、OBからの期待と篤い支援を受けて日々勉学や部活動に励み、充実した学校生活を送っています。昨年度からはOBによる進路講話が実現し、今年度12月の講話も大変好評でした。

また、平成29年度から3修制を導入することになり、内規の整備や教育課程の工夫が大詰めを迎えるところです。毎年4～6月には、新入生を中心として全授業における「サポート体制」が実施され、全教諭が互いに授業サポートに入っています。また、道からの「学校サポーター派遣事業」「SC派遣事業」「特別支援教育パートナーティーチャー派遣事業」など数々の支援の他、局の進路相談員の力強い応援など、本当に多くの皆様に支えられています。そのお陰で、在籍生徒の半分以上を占める「不登校の時期を経て本校に入学した生徒たち」の殆どが卒業し、進路実現に至っています。

#### (5) 北海道苫小牧工業高等学校

苫小牧工業高等学校定時制課程では、普通科目と専門科目を学ぶことができます。中学校で勉強や登校に不安を感じた生徒も、「勉強がわかりやすい」「ものづくりを楽しく、専門的に学べる」ことで、四年間かけて、教職員や級友たちと言葉を重ね、経験を積み重ねて成長していく姿が見られます。学校と仕事、部活動、生徒会活動などをこなしながら卒業していく生徒も大勢います。昼間働き、夕方登校。給食を食べて、勉強を克服し、放課後には部活動を行う。大変ですが、充実した毎日になると思いますし、定時制でしかできない生活でもあります。卒業生や在校生からは『「どこの高校を卒業したのか？」も大切かもしれませんが、私は苫工定に入学して「高校で何をしたのか？」という内容の充実で満足しています。』という声や、就職についても、『先輩のみなさんの優秀な実績があります。休まず真面目に努力していれば、きっと良い就職先が決まると思います。わたしも、本州のしっかりとした企業に内定できました。』などの声があります。時に苦しく、辛いことも多い四年間であるとは思いますが、苫工定の生徒たちには笑顔が多いことが、教職員の糧となっています。

#### (6) 北海道苫小牧東高等学校

本校定時制課程は、昭和23年に当時の北海道立苫小牧高等学校（現在北海道苫小牧東高等学校）に併置され、今年度の3月までに2,085名の卒業生を社会に輩出してきた。開校以来苫小牧市内はもとより近隣の町村も含めた幅広い地域の要望に応えるとともに、北海道有朋高等学校の協力校や苫小牧高等商業学校の技能連携校としても、地域社会と連携し、相互理解を深め現在に至っている。近年は「働きながら学ぶ生徒」よりも「様々な生活環境の中、高校卒業資格の取得を目指す生徒」の育成が主となり、コミュニケーション能力の向上、落ち着いた学習環境の中での集中力の育成、メリハリのある生活態度の育成を重点目標に掲げ、日々教育活動を展開している。

**第59回北海道高等学校定時制通信制生徒生活体験発表大会報告**  
**北海道札幌東高等学校 教頭 天野 公宏**

第59回北海道高等学校定時制通信制生徒生活体験発表大会は、平成27年10月20日(火)札幌市教育文化会館において、関係各位のご指導とご協力をいただき無事終了することができました。大会運営の当番校といたしまして、心よりお礼申し上げます。

さて、今年度も全道9支部の定時制高等学校の代表10名と通信制高等学校の代表1名の合計11名が集い開催されました。全ての発表に学校生活における学習や生徒会活動・部活動、あるいは仕事をとおして自分自身が大きく変わったことや、いじめや障がい等を乗り越え、夢を持って前向きに生きていく強い意志が表れており、観覧していた石狩管内の定時制・通信制の生徒の皆さんはもとより、ご来賓をはじめ、ご来場の皆様にも大きな感動を与えてくれました。

生活体験発表と閉会式の間に行われたアトラクションは、札幌を拠点に地道に活動し、武道館を目指す、アコースティック・デュオによるステージでした。この日のために準備していただいた曲をはじめ、すばらしい歌声と演奏を披露していただき、本大会に参加した生徒たちには、たくましく生き抜く勇気と希望を与えていただけたものと思っております。

審査は、全国大会の審査基準に準じ、審査委員長である市立札幌大通高等学校長 佐々木雅男様をはじめ、6名の審査委員により発表内容、発表方法について慎重に審査していただきました。北海道代表として選ばれた北海道札幌工業高等学校、北海道留寿都高等学校の2名の生徒は、自信と誇りを持って全国大会に臨み、その力を存分に発揮してくれたと思います。

第59回北海道高等学校定時制通信制生徒生活体験発表大会の内容につきましては、平成28年1月末に発行されます「輝く青春」第49集に詳しく掲載されますのでご覧いただき、定時制・通信制に通う生徒たちにエールを送っていただきますようお願いいたしまして、報告に変えさせていただきます。



第59回 北海道高等学校定時制通信制生徒 生活体験発表大会 2015.10.20



**北海道高等学校定時制通信制体育大会報告**  
**北海道高等学校定時制通信制体育連盟事務局長**  
**市立札幌大通高等学校 教頭 黒宮 裕久**

平成27年度の事業につきましては、関係各位のご理解とご協力により、すべて滞りなく終えることができました。各支部、各種目専門部におかれましては、春の支部大会に始まり北海道大会、秋季新人戦まで円滑に運営していただき、改めて心より感謝申し上げます。

今年度の北海道大会及び全国大会の成績につきましては、事務局（市立札幌大通高等学校）のWebサイト (<http://www.odori-h.sapporo-c.ed.jp/teitairen/>)に掲載しておりますので、ご参照ください。今年度も北海道チームの活躍は目覚ましく、女子卓球団体（市立札幌大通高校）優勝、女子バスケットボール（市立札幌大通高校）初出場準優勝、男子バドミントン団体（北海道札幌月寒高校）第3位、柔道軽量級個人（北海道有朋高校）高田寛也くん全国優勝、女子陸上200m（北海道有朋高校）小島純香さん全国6位入賞など様々な種目で好成績を残してくれました。

全道大会の当番支部のローテーションにつきましては、各支部では生徒数が減少し、それに伴う教員数の減少、さらに今後統廃合がさらに進めば大会の運営が困難な状況もありますが、当面は現在のローテーションで開催していくこととなります。ご理解・ご協力をお願いいたします。今年度は上川・空知支部が当番支部でしたが、次年度は胆振・後志支部が当番支部となります。

また、定通部の大会では発足以来、記録や勝敗にこだわるだけのスポーツの祭典ではなく、困難な環境から満足のいく練習ができなくともスポーツを愛する心や、自己のレベルに合わせた目標に向かって挑戦すること、お互いの健闘をたたえあうことを標榜してきました。今後とも、各校でのご指導をよろしくお願い申し上げます。

**調査研究部報告**  
**教頭・副校長会定通部会調査研究部長**  
**北海道江別高等学校 教頭 能登 啓児**

2015年7月、中教審は「チームとしての学校の在り方と今後の改善方策について」の中間まとめを発表しました。複雑化・多様化する学校の課題に対応し、子どもたちの豊かな学びを実現するため、教員が担ってきた業務を見直し、専門的な知識や経験を持つスタッフが学校教育に参画し、教員との協働により、課題の解決に当たる「チームとしての学校」体制を構築することが求められてきています。

今後、環境や体制の整備が進んでいくことは周知の通りですが、既にここ数年でスクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーの配置をはじめ、様々な制度が体制化されてきています。しかし、学校現場での制度についての理解不足のために、生徒・保護者が適切なサポートを受けられていないという現状もあります。定通教育における生活指導はかねてより、外部との連携が重要とされているため、教員と外部組織とをより一層連携させ、様々な困難を抱えた生徒に対して多面的な支援をすることが管理職員に課せられた責務でもあります。

そこで今年度は、「チーム学校への歩み ～学校外の組織との連携をするために必要な手立て～」をテーマとし、全道定時制・通信制高校の教育活動における外部組織との連携状況について調査を行い、先進的な取組等にもスポットを当て、各校のチーム学校体制構築に寄与したいと考え、アンケート調査を実施しました。

調査方法等は次のとおりです。

- (1) 調査対象：北海道高等学校教頭・副校長会  
定時制通信制部会に加盟の44校
- (2) 調査期間：平成27年10月12日(月)  
～11月4日(水)
- (3) 回答者：各校の教頭・副校長先生
- (4) 回収率：98%

調査研究部

部長 能登 啓児（北海道江別高等学校）  
部員 深澤 健（北海道恵庭南高等学校）  
天野 公宏（北海道札幌東高等学校）  
中島 康晴（北海道千歳高等学校）

チーム学校への歩み ～学校外の組織との連携をするために必要な手立て～

定通部会調査研究部

調査研究部長 能 登 啓 児 (北海道江別高等学校)  
 調査研究部員 深 澤 健 (北海道恵庭南高等学校)  
 天 野 公 宏 (北海道札幌東高等学校)  
 中 島 康 晴 (北海道千歳高等学校)

1 はじめに

2015年7月に中教審は「チームとしての学校の在り方と今後の改善方策について」の中間まとめを発表した。複雑化・多様化する学校の課題に対応し、子どもたちの豊かな学びを実現するため、教員が担ってきた業務を見直し、専門的な知識や経験を持つスタッフが学校教育に参画し、教員との協働により、課題の解決に当たる「チームとしての学校」体制を構築することが求められている。

今後、環境や体制の整備が進んでいくことは周知の通りだが、既に、ここ数年でスクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーの配置をはじめ、様々な制度が体制化されてきている。しかし、国や自治体が推進する取組や制度の活用、各種法人による先駆的な取組が行われているにもかかわらず、学校現場での制度についての理解不足のために、生徒・保護者が適切なサポートを受けられていないという現状もある。定通教育における生活指導はかねてより、外部との連携が重要とされているため、教員と外部組織とをより一層連携させ、様々な困難を抱えた生徒に対して多面的な支援をすることが管理職員に課せられた責務でもある。

そこで今年度は、「チーム学校への歩み ～学校外の組織との連携をするために必要な手立て～」をテーマとし、全道定時制・通信制高校の教育活動における外部組織との連携状況について調査を行い、先進的な取組等にもスポットを当て、各校のチーム学校体制構築に寄与したいと考える。

2 アンケート調査の概要

調査は、選択方式及び記述方式によるアンケートで実施した。

調査対象は、北海道高等学校教頭・副校長会定時制通信制部会に加盟する44校とし、調査期間は2015年10月12日から同年11月4日とした。43校から回答を得られ、回収率は98%であった。

アンケートによって得られた回答は調査研究部員が集計・検討し、分析結果を文章化した。

なお、各校の回答には何らかの都合で回答されていないものがあり、項目ごとの総データ数は必ずしも一致しない。

3 アンケート結果と考察

アンケート結果は、設問項目の種類によって分類し、次のとおりに考察した。

| 大分類                                | 中分類                           | 考察対象の設問                          |
|------------------------------------|-------------------------------|----------------------------------|
| I スクールカウンセラーについて<br>(設問 1～11)      | ア.活用の状況<br>イ.活用の内容<br>ウ.成果と課題 | 設問 1～2<br>設問 3～6<br>設問 7～11      |
| II スクールソーシャルワーカーについて<br>(設問 12～23) | ア.活用の状況<br>イ.活用の内容<br>ウ.成果と課題 | 設問 12～13<br>設問 14～17<br>設問 18～23 |
| III その他の外部組織との連携について<br>(設問 24～27) | ア.外部組織との連携<br>イ.連携に関する事業      | 設問 24～25<br>設問 26～27             |
| IV 外部組織との連携についての自由記述 (設問 28)       |                               |                                  |

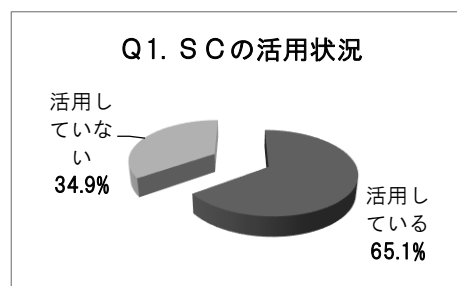


以下、スクールカウンセラーをS C、スクールソーシャルワーカーをS S Wと表す。

## I スクールカウンセラーについて

### ア S Cの活用状況

設問1は今年度におけるS Cの活用状況について回答いただいた(有効回答43)。「活用している」または「活用を予定している」学校が28校(65.1%)、「活用していない」または「活用の予定がない」学校が15校(34.9%)であった。



設問2は設問1において、「活用している」または「活用を予定している」と回答した28校について(以下設問8まで同じ)、活用の回数や時間について回答いただいた。年間合計回数の平均は14.7回(最大62回・最小1回)、年間合計時間の平均は50.0時間(最大577時間・最小2時間)、1回の平均時間の平均は2.4時間(最大9時間・最小1時間)であった。ただし、S Cの複数配置がある都市部の一校を除いた場合、年間合計回数の平均は12.8回(最大26回)、年間合計時間の平均は30.5時間(最大90時間)、1回の平均時間の平均は2.2時間(最大6時間)であった。市町村立高校の中では、市町村が独自に予算化し、充実した取組を行っている学校も見られた。

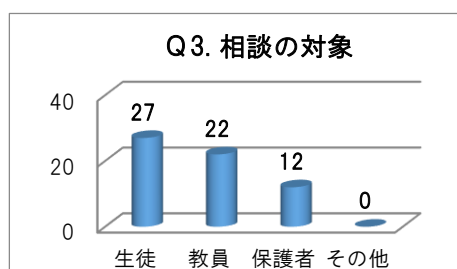
### 考 察

▽活用している学校は65%程にとどまっているが、設問9で「必要性がない」と回答している学校の中にも、必要性が生じた場合は積極的に活用を考えたいとの補足記述も有り、多くの学校がS Cの活用に積極的なのがわかる。

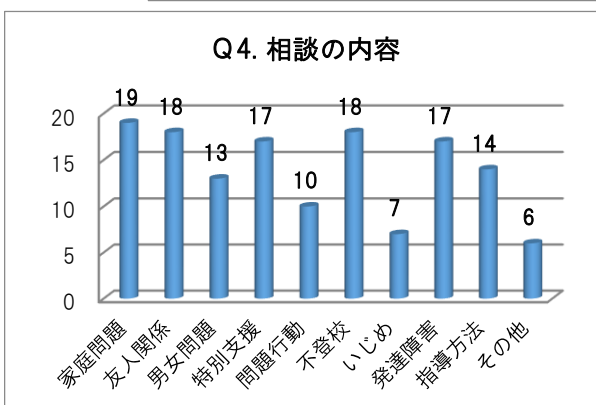
▽生徒在籍数の多い一部の学校を除くと、S Cの勤務日数、一回当たりの勤務時間とも、必要な時間数がなかなか確保出来ていないと思われる。地域にもよるが、小中学校ではこの数年、S Cの配置が充実してきており、多くの学校で100時間を超える配当時間がある。定時制通信制でも生徒の特徴を考えると、S C配置のさらなる充実が求められる。

### イ S Cの活用内容

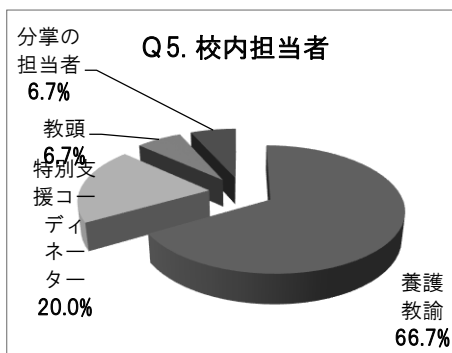
設問3は相談の対象について回答いただいた(有効回答数28/複数回答)。対象として最も多いのは「生徒」で28校中27校(96.4%)、「教員」が22校(78.6%)、「保護者」が12校(42.9%)であった。その他と回答した学校はなかった。



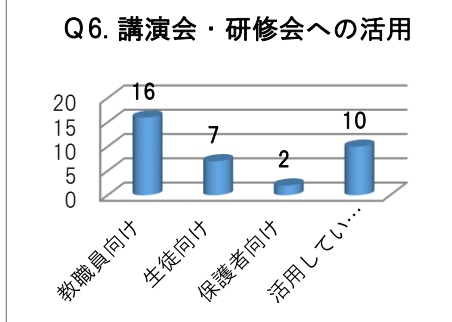
設問4は相談の内容について回答いただいた(有効回答数28/複数回答)。相談内容として最も多いのが「家庭問題」で19校(67.9%)、続いて「友人関係」「不登校」が18校(64.3%)、「特別支援」「発達障害」の17校(60.7%)と続いた。その他にも一定数の回答があり、相談内容は多岐に渡っている。その他とて、「進路関係」「自己理解」「教室に入れない生徒の支援」等、相談内容は多岐に渡っている。



設問 5 は校内の主な担当者について回答いただいた（有効回答数 30）。担当者として最も多いのは「養護教諭」で 20 校（66.7%）、次に「特別支援コーディネーター」の 6 校（20.0%）であった。「分掌の担当者（進路、保健等）」と「教頭」がともに 2 校（6.7%）であった。特別支援コーディネーターを養護教諭が担当している学校も多く、かなり高い割合で担当者が養護教諭となっている。



設問 6 は講演会や研修会への活用について回答いただいた（有効回答数 28/複数回答）。「教職員向け」に活用しているが 16 校（57.1%）、「生徒向け」が 7 校（25.0%）と続き、「保護者向け」の講演会や研修会への活用は 2 校（7.1%）にとどまった。また、「活用していない」と回答したのは 10 校（35.7%）で、SCを活用している 3分の2以上の学校で講演会や研修会でもSCを活用していることがわかる。



### 考 察

▽SCの相談対象として最も大きな割合を占めるのは生徒であるが、教員や保護者を対象としている学校も一定数ある。また、SCを講演会や研修会の講師としてお願いしている学校も多く、限られた配当時間の中で、幅広い活用がなされている。

▽SCの相談内容は多岐に渡っており、案件によっては複雑に絡み合っていることが想像できる。定時制・通信制の生徒は家庭や友人関係に課題を抱える者も多く、専門的な知識と対応力が求められる。また、教職員だけでは対処出来ない場合が多いため、SCに期するものは大きい。

▽校内の担当者として、養護教諭への依存度が高いことが分かる。保健室が生徒相談としての役割を果たしていることが大きい、教職員全体で関わっていくことが大切である。

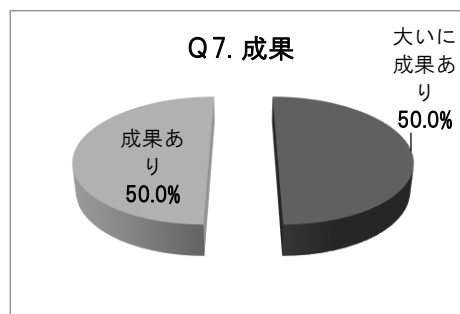
▽SCを有効利用するためには、SCと校内担当者との連携及び校内担当者による取組が必要である。養護教諭など一部の教職員だけでなく、管理職をはじめ、分掌部長等が積極的に関わっていくことが大切である。

### ウ SCの成果と課題

設問 7 は成果の実感について 3つの選択肢から回答いただいた（有効回答数 28）。「大いに成果あり」「成果あり」が 14 校（50.0%）ずつで、「あまり成果なし」と回答した学校はなかった。

「成果あり」の理由として、生徒の状況変化や指導助言の有効性が多く挙げられた。その他として、

- ・研修会を通して特別支援に関する理解度が深まった。
  - ・校内だけでなく、様々な連携先とつないでいただいた。
  - ・教職員にカウンセリングマインドの重要性を認識させてくれた。
- 等が挙げられた。

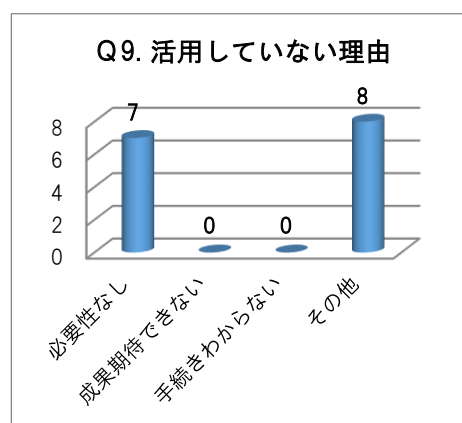


設問 8 は活用にあたっての課題について自由記述で回答いただき、次のように分類した。

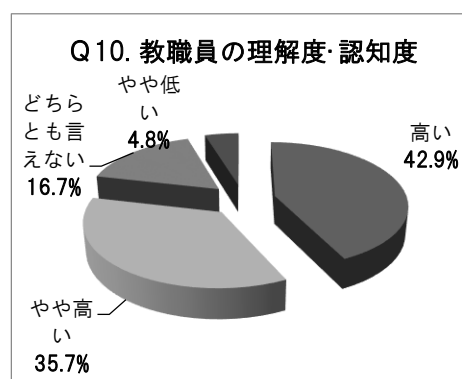
| 分類                    | 主な回答  |
|-----------------------|---|
| 校内体制<br>に関わって         | <ul style="list-style-type: none"> <li>・理解を示せない教員がいる。</li> <li>・相談内容の教員間での共有や活用方法についての考え方の違い。</li> <li>・全日制の主体事業に乗っているため、割当時間の確保が難しい。</li> <li>・「アセス」の活用とそのアセスメント。</li> </ul> |
| 手続き<br>に関わって          | <ul style="list-style-type: none"> <li>・現行の方法では突発的に必要なケースに依頼できない。</li> <li>・近隣に居住する S C が少ない。</li> </ul>  |
| 配当時間<br>・費用等<br>に関わって | <ul style="list-style-type: none"> <li>・絶対的に配当時間が不足している。</li> <li>・緊急派遣を活用すると派遣料が必要であった。</li> <li>・常勤でなければ課題を解決しきれない。</li> </ul>  |

設問 9 は設問 1 において、「活用していない」または「活用の予定がない」と回答した 15 校に、その理由について 4 つの選択肢の中から回答いただいた（複数回答）。「必要性がない」が 7 校（46.7%）、その他が 8 校（53.3%）であった。その他の具体的な理由として、

- ・校内（教育相談委員会等）で対応できている。
  - ・町立高校のため独自の申請が必要である。
  - ・全日制との配分がうまく調整できない。
- 等が挙げられた。



設問 10 は回答者から見た、教職員の S C に関する理解度や認知度について 5 段階の中から回答いただいた（有効回答数 42）。理解度・認知度が「高い」が 18 校（42.9%）、「やや高い」が 15 校（35.7%）で、「高い」「やや高い」を併せると約 8 割にのぼった。一方で、「やや低い」と回答したのは 2 校（4.8%）で、「低い」を選択した学校はなかった。



設問 11 は各校における特徴的な取組や制度に関する要望について回答いただいた。

**特徴的な取組**として、

- ・全校生徒との個人面談を実施、情報を共有している。
- ・新生や転入生には全員カウンセリングを実施している。

**要望事項**としては、時間・予算面の充実化に関するものが殆どであったが、

- ・性別の偏りがないように配置してもらいたい。
  - ・必要な時に活用できるような柔軟な制度運用
  - ・協力校への配置
- 等が挙げられた。

## 考 察

▽課題や要望で圧倒的に多かったものが、「配当時間の不足」であった。S Cとの相談を必要とする生徒が多く、教職員もその成果を実感しており、今後さらにニーズが高まると思われる。また、S Cが都市部居住の場合が多く、緊急対応が出来ないとの記述が複数あった。

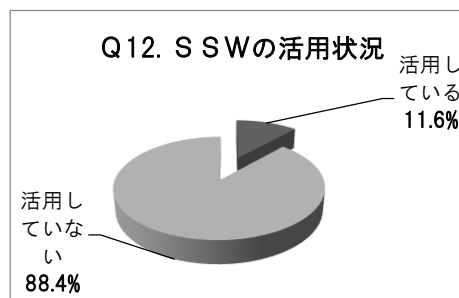
▽全日制との調整や協力校への配置など、定通ならでの課題もみられる。

▽ここ数年の間に、S Cに対する教職員全体の意識が向上している。設問 10 において、回答者からみた教職員の理解度・認知度で、「高い」が8割近くであり、重要度の高さと変化の速度には目を見張るものがある。

## Ⅱ スクールソーシャルワーカーについて

### ア S S Wの活用状況

設問 12 は今年度における S S Wの活用状況について回答いただいた（有効回答 43）。「活用している」または「活用を予定している」学校が5校（11.6%）、「活用していない」または「活用の予定がない」学校が38校（88.4%）であった。



設問 13 は設問 12 において「活用している」と回答した5校について（以下設問 17 まで同じ）、今年度の活用件数について回答いただいた。最大件数が11件、最小件数は1件で5校の平均活用件数は4.4件であった。

## 考 察

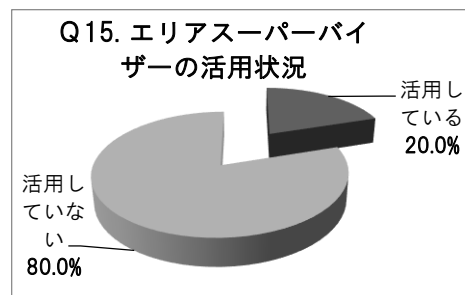
▽S Cと比較すると、S S Wの活用状況は非常に低かった。その要因は、設問 20・設問 21・設問 23 の回答から、大きく「活用に至る事案がないこと」、「緊急性・即時性に対応出来ないイメージがあること」の2点が挙げられる。

### イ S S Wの活用内容

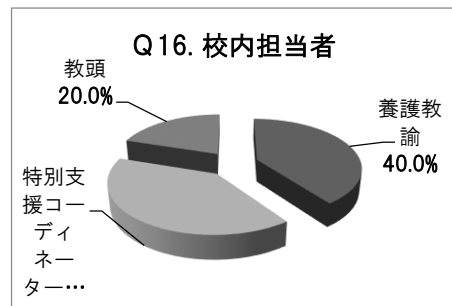
設問 14 は今年度の活用事例について具体的に記述いただいた（有効回答数 5）。

- ・精神的に不安定な生徒及び家族への対応と卒業後の相談機関の紹介
  - ・家庭における経済的問題に関する相談及び自立支援
  - ・「ゴミ屋敷」問題の解決への支援
  - ・家庭内におけるD V問題への対応
- 等が挙げられた。

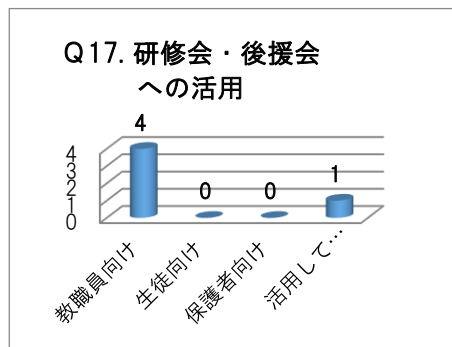
設問 15 はエリアスーパーバイザーの活用について回答いただいた（有効回答数 5）。「活用している」が1校（20.0%）、「活用していない」が4校（80.0%）であった。



設問 16 は校内の主な担当者について回答いただいた（有効回答数 5）。「養護教諭」と「特別支援コーディネーター」がそれぞれ 2 校ずつ（各 40.0%）、「教頭」が 1 校（20.0%）であった。特別支援コーディネーターを養護教諭が担当している学校も多く、S C と同様に養護教諭の担当割合が高い。



設問 17 は講演会や研修会への活用について回答いただいた（有効回答数 5 / 複数回答）。「教職員向け」に活用しているが 4 校（80.0%）、「活用していない」と回答したのは 1 校（20.0%）で、生徒向けや保護者向けの講演会や研修会への活用事例はなかった。



### 考 察

▽設問 14～17 は活用している 5 校に聞いているため、母集団が小さく、傾向としてまとめるのは難しいが、S C と同様に S S W の成果は疑いようがない。

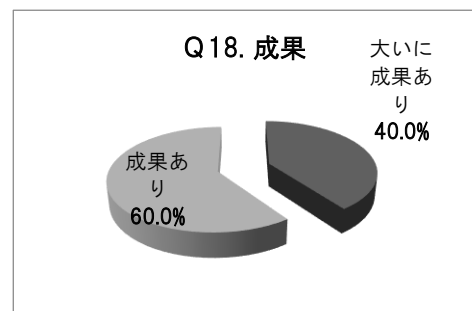
▽エリアスーパーバイザーの活用に関しては、制度の浸透が成されていない感がある。

▽S S W の相談内容はその性格から、全てが家庭に関するものであった。今回、回答いただいた学校以外の活用事例については、家庭との連携を図りたい場合、または生徒本人よりも家庭に課題が有る場合など、多様なケースで S S W の専門性が活かされ、関係機関との連携が図られている。

### ウ S S W の成果と課題

設問 18 は成果の実感について 3 つの選択肢から回答いただいた（有効回答数 5）。「大いに成果あり」が 2 校（40.0%）、「成果あり」が 3 校（60.0%）で、「あまり成果なし」と回答した学校はなかった。

「成果あり」の理由として、「家庭の経済的エリアには教員は立ち入れないため」S S W による生徒の状況変化や指導助言の有効性が多く挙げられた。



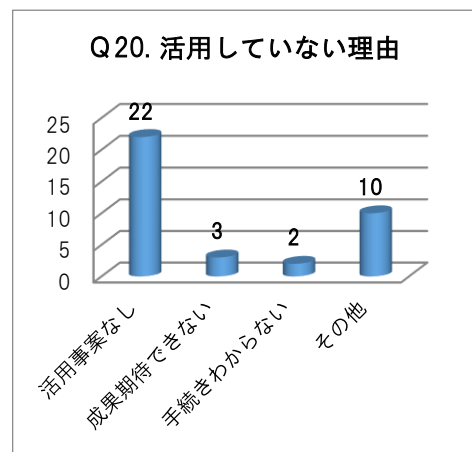
設問 19 は活用にあたっての課題について自由記述で回答いただいた（有効回答数 2）。

- ・ S S W が遠方に居住されているため、急な対応が難しい。
  - ・ 協力校への配置
- の 2 点が挙げられた。

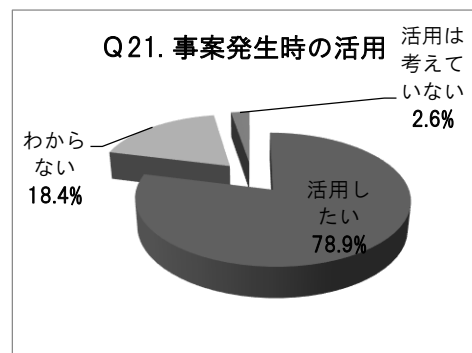
設問 20 は設問 12 において、「活用していない」または「活用の予定がない」と回答した学校に、その理由について4つの選択肢の中から回答いただいた(有効回答数 37/複数回答)。「活用すべき事案がない」が 22 校 (59.5%)、「成果が期待できない」が 3 校 (8.1%)、「手続きの方法がわからない」が 2 校 (5.4%) であった。その他は 10 校 (27.0%) で具体的な理由として、

- ・ S C が役割を兼ねている。
- ・ S C の対応で十分である。
- ・ 校内体制が整っていない。
- ・ 保護者の同意への不安がある。

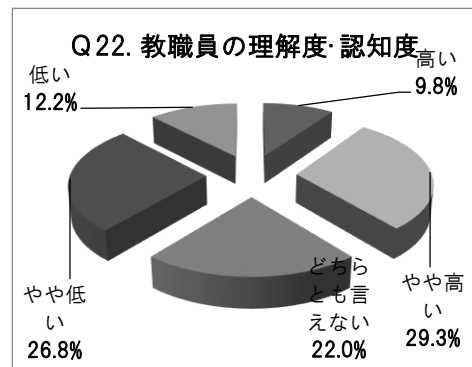
等が挙げられた。



設問 21 も活用実績のない学校を対象に、事案が生じた場合の活用について3つの選択肢の中から回答いただいた。(有効回答数 38)「是非活用したい」が 30 校 (78.9%)、「わからない」が 7 校 (18.4%) で、「活用は考えていない」は 1 校 (2.6%) にとどまった。事案が生じた際には S S W の活用が有効であると考えている学校が圧倒的に多数だった。



設問 22 は回答者から見た、教職員の S S W に関する理解度や認知度について 5 段階の中から回答いただいた(有効回答数 41)。理解度・認知度が「高い」が 4 校 (9.8%)、「やや高い」が 12 校 (29.3%) で、「高い」「やや高い」を併せると約 4 割であった。一方で、「やや低い」が 11 校 (26.8%)、「低い」が 5 校 (12.2%) で、「低い」「やや低い」を併せた割合も約 4 割となり、S C に関する理解度や認知度(設問 10 参照)とは差異が見られた。



設問 23 は各校における特徴的な取組や制度に関する要望について回答いただいた。

**特徴的な取組**として、

- ・ S S W を通じて、福祉関係団体と連携し、必要に応じて支援いただく体制をとっている。

**要望事項**としては、柔軟な制度運用に関するものが多く、

- ・ 地域ごとに配置してもらいたい。
- ・ 緊急性、即時性が必要な事案が多いため、タイムラグなく活用できる仕組み。
- ・ 手続きの簡素化
- ・ 協力校への配置

等が挙げられた。

## 考 察

▽SCと比べ、SSWの認知度及び理解度はまだまだ高いとは言えない。活用事例が少なく、有効性を実感していないのが最も大きな要因であるが、活用するための手続きの複雑さやSSWの絶対数が少ないことも大きく影響していると思われる。

▽定時制通信制課程に通う生徒は、家庭状況等に課題を抱える者の割合も高く、より活用が進むよう、手続きの方法や配置人数等について、行政に働きかけをしていく必要がある。

▽SSWを活用している学校からは、「家庭問題に関して、教職員の対応には限界があり、SSWの存在は不可欠」との意見をいただいた。管理職がSSWの具体的な役割や活用事例を広く教職員に示していくことも必要である。

## Ⅲ その他の外部組織との連携について

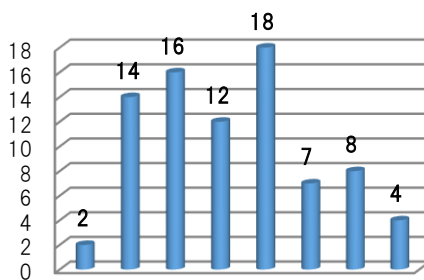
### ア 外部組織との連携

設問 24 はそれぞれの学校で取り組んでいる、SC・SSW以外の学校外部との連携について回答いただいた（有効回答数 43／複数回答）。

「パートナーティーチャー」が18校（41.9%）、「若者サポートステーション」が16校（37.2%）、「大学との連携」が14校（32.6%）、「子育て支援室等の地域行政との連携」が12校（27.9%）と続いた。また、「民間のカウンセラー」を活用している学校も7校（16.3%）有り、その他として、「児童相談所」、「福祉系NPO」、「日本語を母国語としない生徒の指導」等が挙げられた。

「特になし」という回答が4校（9.3%）だったことから、9割以上の学校が何らかの連携を外部組織と行っていることがわかる。

Q24. 学校外部との連携



設問 25 は設問 24 で選択したものについて、活用事例や成果・課題を自由記述の形で回答いただいた。回答の中から、主なものを紹介する。

### カウンセリングICT事業について

- ・心理学の専門家と担任が、「ほっと」の活用方法や事例について研修

### 大学との連携について

- ・アンテナショップの開設から運営に必要な専門知識を出前授業形式で全校生徒が受講
- ・千歳科学技術大学と連携し、数学の授業で大学生を学習ボランティアとして活用
- ・北海道教育大学の社会人大学院生が臨床心理士の資格を得るため、カウンセラーとして協力
- ・北海道教育大学の学生を集団カウンセリングの授業におけるファシリテーターとして活用
- ・酪農学園大学のSAT事業を活用し、大学生による学習サポートを実施
- ・医療系大学生によるピアサポート活動
- ・旭川医科大学の学生サークル「Med-Edu」による、デートDV防止教室の実施
- ・カタリバ派遣授業での活用

### 若者サポートステーションについて

- ・毎年来校してもらい、カウンセリングを実施
- ・就業意識や社会人としてのマナーを身に付けることを目的に、労働講座等を実施

- ・保護者とサポステと学校で情報を共有しながら不登校生徒に対応
- ・長期休業前の全校集会の会場として利用
- ・進路講演会での講師として依頼

#### 子育て支援室等地域行政との連携について

- ・子育て支援室の方と年2回、新入生を中心に生徒の中学時の様子などを情報交換
- ・連続欠席の生徒や連絡の出来ない生徒の指導に児童相談所や生活保護課と連携
- ・市立図書館での学校紹介の展示、学校への助成
- ・学校と支援室、児相、生活保護課、警察等による家庭に問題を抱える生徒のサポート会議実施
- ・家庭内DVに対するシェルターとのつなぎ方、生活保護へのつなぎ方で情報交換

#### パートナーティーチャーについて

- ・特別支援教育全般に係る指導や支援
- ・年3回の派遣で、生徒の実態観察及び必要に応じての検査を実施し、個別の指導計画作成
- ・特別な支援が必要な生徒に対する教職員への指導や助言及び校内研修における助言
- ・発達障害の生徒に対する指導を学ぶための事例研究や個別指導に関する助言

#### 民間のカウンセラーについて

- ・学校設定科目「ジョブトレーニング」での進路アドバイザーとして活用

#### 福祉系NPOについて

- ・家庭に大きな課題を抱える事案について、生徒の自立への連携

#### 日本語を母国語としない生徒の指導について

- ・北海道高等学校サポーター事業により、自校を卒業した日本語を母国語としない生徒を活用

#### 考 察

▽多くの学校が、様々な外部組織との連携を行っている。学校が持つ知識や体制に加え、専門的知識を持つ外部の人材を有効に活用することによって、学校や生徒の課題解決にプラスに働くことは言うまでもなく、これらの取組を各校が共有することに大きな意味がある。

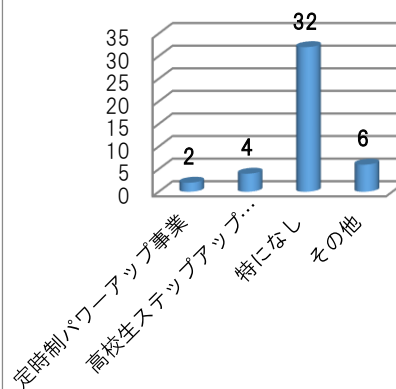
▽特に連携が多かったのが、「パートナーティーチャー」「若者サポートステーション」「大学との連携」「子育て支援室等の地域行政との連携」であった。大学生の活用は専門家ではないが、生徒との年齢的な距離が近いこともあり、双方にメリットがあるなど、成果も期待できる。

#### イ 連携に関する事業

設問26はそれぞれの学校で取り組んでいる、学校外部に係る連携事業について回答いただいた（有効回答数43／複数回答）。「高校生ステップアップ・プログラム」が4校（9.3%）、「定時制パワーアップ事業」が2校（4.7%）、その他として、「北海道教育大学学校支援ボランティア」「酪農学園大学学校支援ボランティア（SAT）事業」「北海道高等学校サポーター支援事業」「学力に問題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する調査・研究」「いじめ未然防止モデルプログラム事業」等が挙げられた。進路関係や行事支援等の事業名を挙げられている学校も有り、設問がやや曖昧だったことを反省している。

「特になし」が32校（74.4%）だったことから、これらの事業を活用している学校は約4校に1校の割合であった。

Q26. 学校外部との連携事業





設問 27 は設問 25 で選択した事業について、その成果・課題を自由記述の形で回答いただいた。回答の中から、主なものを紹介する。

#### 定時制パワーアップ事業について

〈成果〉・他校視察や各研修会に参加し、校内の学習支援に対する意識改革が為され、スキルアップが図られている。

・特別支援員、SC、PT等、外部機関との連携により、教育相談体制が確立された。

〈課題〉・事業がなくなったときに、教育相談体制を維持していく難しさを危惧している。

#### 高校生ステップアップ・プログラムについて

〈成果〉・SC確保に役立っている。

・定期的に集団カウンセリングを行うことで、生徒のソーシャルスキルが高まっている。

・予防的、開発的カウンセリングの実施を通じて、退学者の減少につながっている。

#### 北海道教育大学学校支援ボランティアについて

〈成果〉・生徒の学習意欲、理解度の向上がみられた。

#### 酪農学園大学学校支援ボランティア（SAT）事業について

〈成果〉・教員志望大学生による学習サポートにより、高校生と大学生両者にとってメリットがある。

〈課題〉・当初、具体的な活動内容を誰がどのような形で作成していくかで戸惑いがあった。実施を重ねていくことで、解消が可能と考えている。

#### 北海道高等学校サポーター支援事業について

〈成果〉・基礎計算が身に付き、学習意欲の向上につながった。

〈課題〉・指定された時期が遅く、人選等その後の対応に苦慮している。

#### 学力に問題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する調査・研究について

〈成果〉・アクティブラーニングを取り入れた授業展開により、生徒が自発的に自分の考えをまとめ、発言するようになり、クラス内のコミュニケーションが深まり苦手な授業にも積極的に取り組んでいる。

#### いじめ未然防止プログラム事業について

〈成果〉・デートDV防止教室を実施し、いじめ未然防止につながっている。

#### 考 察

▽外部組織との連携に関する事業に取り組んでいると回答した学校は道教委が推進する事業では、指定校数も限られることもあり、全体の約 25%程度であった。しかし、短期的な事業（行事等での講師派遣に関するもの等）や進路に関わる事業に取り組んでいる学校もある。

▽選択肢にある事業に取り組んでいると回答いただいた学校では、事業への指定終了後の体制の維持に予算面からの不安を表す記述が複数あった。

▽設問 24 との関わりで、大学生との連携を大学側で推進している事業の下で行っているものがあった。大学側からの打診で取り組んでいるようであるが、必要に応じて、高校側から大学へと連携を呼びかける方法もある。

#### IV 外部組織との連携についての自由記述

最後に、学校における外部組織との連携について自由記述の形で回答いただいた。重複を避けながら、出来る限り記述のあったものをそのままの形で紹介する。

- ▼昨年度はS Cを、今年度は局のS Vを招致して全定合同の校内研修を行った。今年度S C及びS S Wへの依頼はしていないが、連携しないわけではなく、必要があれば利用していきたい。
- ▼定時制課程のような教員数の少ない学校には、教育活動の維持・改善に外部連携は不可欠。
- ▼S CもS S Wも予算との関係があって、利用の計画を立てなければならないのはわかるが、本当に必要な時は突発的な場合が多く、臨機応変に使える方が現場としては助かる。外部組織といつでも助けますよというような緩やかな連携を築く方が重要ではないか。
- ▼大学、民間企業や道など連携を図り、様々な事業を行っており、成果を挙げている。
- ▼高校生パワーアップ事業の指定を受けて3年目を迎えるが、特別支援員の配置による学習支援においては、発達障害を抱える生徒に基礎学力の定着を図るうえで大きな効果を挙げている。また、S C・P T・S S W等と精神的に不安定な生徒の情報を共有し、指導の助言や対応にあたるなど重ねて大きな効果を挙げている。
- ▼児童相談所や子育て支援室と常に連絡を取れるようにしている。
- ▼外部組織との有機的な連携並びに校内体制の整備（事務を含む）により、教職員の業務負担が縮減され、生徒と向き合う時間が確保できれば良い。さらなる生徒理解を深めるために、管理職には外部組織と教職員とのコンセンサス確立をコーディネートする能力が必要になる。
- ▼教師の資質能力の向上を見据えた校内外の研修、生徒のキャリア学習の一環に専門家の助言や協力、生徒の心の問題など多岐に渡り、活用するべきと考える。連携には管理職のリーダーシップとミドルリーダーの協力が不可欠である。
- ▼資金的な支援が必要である。
- ▼教職員には現場に外部が入ることを厭う傾向もあり、意識を変えていく必要を感じる。
- ▼Y T Lホテルスクール(マレーシア)、札幌国際大学と連携協定を結び、観光教育に取り組んでいる。
- ▼キャリア教育として、地元企業主による講演会を実施し、ボランティア活動として地域行事に参加させること等で社会に必要な力や将来の夢づくり、主体的に学ぶ意欲を喚起している。

#### 4 おわりに

2015年12月、中教審はスクールソーシャルワーカー等、福祉分野の専門家を学校職員として来年度にも正式に位置づけることを文部科学省に答申した。また、公立の全小中学校に専任のスクールカウンセラーを配置する方向性も示した。他にも部活動の外部指導者を学校職員として位置づけるなど、「チーム学校」への体制づくりが着々と進んでいる。しかし、これらの制度が高校に浸透するには少なからず時間を要することも考えられる。現在もスクールカウンセラー配置に関して言えば、小中学校に比べると、高校では充実した体制になっているとは言い難い。

これまで日本では、学校での教職員の総数に占める教員以外の専門家の割合が国際的に比較して非常に低く、課題を抱えた生徒及び保護者への対応等について外部の人材や組織との連携が充分には図られてこなかった。定時制通信制課程には、家庭状況等に複雑な事情を抱えている生徒や学習理解・学習姿勢に課題の有る生徒、人間関係の構築に苦戦している生徒が数多く在籍しており、それらの課題を生徒自らの力で解決することは容易ではない。そのため、多様化する生徒に対して教職員と専門的知識を持つ外部の人材や組織がより一層連携し、機動的な学校組織体制の構築を目指す「チーム学校」の理念は大いに期待できる。

今回の調査で、道内定時制通信制各校が、在籍する生徒の健全な成長のために地域の教育力の活用をはじめ、様々な連携を模索し、取組を進めていることがわかった。これらの情報を共有し、それぞれの学校で、独自の「チーム学校」づくりを推進することが出来ればと考える。最後となるが、校務多用の中、アンケート調査に丁寧に回答いただいた副校長先生・教頭先生に心より感謝申し上げます。

## ◆基本情報◆

(1) 学校名 (2) 課程名 (3) 回答者職名 (4) 回答者氏名 (5) 学級数 (6) 生徒数

## ◆調査項目◆

## Ⅰ スクールカウンセラーについて

設問 1 今年度の活用について、どちらか1つお選びください。(未実施でも予定がある場合は ア としてください。)

ア 活用している →設問2～8へ      イ 活用していない →設問9へ

設問 2 年間の活用回数について、具体的にご記入ください。

年間\_\_\_\_回・合計\_\_\_\_時間・1回平均\_\_\_\_時間

設問 3 相談の対象として、当てはまるものをすべてお選びください。

ア 生徒      イ 教員      ウ 保護者      エ その他(      )

設問 4 相談の内容として、当てはまるものをすべてお選びください。

ア 家庭問題      イ 友人関係      ウ 男女問題      エ 特別支援      オ 問題行動      カ 不登校  
キ いじめ      ク 発達障害      ケ 指導方法に関する相談      コ その他(      )

設問 5 校内での主な担当者をいずれか1つお選びください。

ア 養護教諭      イ 特別支援コーディネーター      ウ 教頭  
エ 分掌の担当者(分掌名:      )      オ その他(      )

設問 6 講演会や研修会への活用について、当てはまるものをすべてお選びください。

ア 教職員向けのものに活用      イ 生徒向けのものに活用  
ウ 保護者向けのものに活用      エ 講演会や研修会には活用していない

設問 7 相談や研修の成果についてどう感じていますか、次の中からいずれか1つお選びください。

また、そう感じる理由を具体的にご記入ください。

ア 大きい(期待できる)      イ やや大きい      ウ あまりない(あまり期待できない)  
(具体的に:      )

設問 8 貴校での活用にあたっての課題があれば、具体的にご記入ください。

(具体的に:      )

設問 9 (設問1で「イ」と回答した方) 活用していない理由として当てはまるものをすべてお選びください。

ア 必要性がない      イ 成果が期待出来ない      ウ 手続きがわからない      エ その他(      )

設問10 スクールカウンセラー全般に関する校内の教職員の認知度・理解度について、次の中からいずれか1つお選びください。

ア 高い      イ やや高い      ウ どちらとも言えない      エ やや低い      オ 低い

設問11 スクールカウンセラー全般について、貴校の特徴的な取組や制度に関する要望がありましたら、具体的にご記入ください。

(具体的に:      )

## Ⅱ スクールソーシャルワーカーについて

設問12 今年度の活用について、どちらか1つお選びください。(未実施でも予定がある場合は ア としてください。)

ア 活用している →設問13～19へ

イ 活用していない →設問20～21へ

設問13 今年度の活用件数について、具体的にご記入ください。(予定件数を含む。)

\_\_\_\_件

設問14 今年度活用した事例について、具体的にご記入ください。

(具体的に:      )

設問15 エリアスーパーバイザーの活用について、どちらか1つお選びください。(未実施でも予定がある場合はアとしてください。)

ア 活用している イ 活用していない

設問16 校内での主な担当者をいずれか1つお選びください。

ア 養護教諭 イ 特別支援コーディネーター ウ 教頭

エ 分掌の担当者(分掌名: ) オ その他( )

設問17 講演会や研修会への活用について、次の中で当てはまるものをすべてお選びください。

ア 教職員向けのものに活用 イ 生徒向けのものに活用

ウ 保護者向けのものに活用 エ 講演会や研修会には活用していない

設問18 活用の成果についてどう感じていますか、次の中からいずれか1つお選びください。

また、そう感じる理由を具体的にご記入ください。

ア 大きい(期待できる) イ やや大きい ウ あまりない(あまり期待できない)

(具体的に: )

設問19 貴校での活用にあたっての課題があれば、具体的にご記入ください。

(具体的に: )

設問20 (設問12で「イ」と回答した方)活用していない理由として、当てはまるものをすべてお選びください。

ア 活用すべき事案がない イ 成果が期待出来ない ウ 手続きがわからない エ その他

(具体的に: )

設問21 事案が生じたときには活用したいと考えていますか、次の中からいずれか1つお選びください。

ア 是非活用したい イ わからない ウ 活用することは考えていない

設問22 スクールソーシャルワーカー全般に関する校内の教職員の認知度・理解度について、次の中からいずれか1つお選びください。

ア 高い イ やや高い ウ どちらとも言えない エ やや低い オ 低い

設問23 スクールソーシャルワーカー全般に関する制度に対する要望がありましたら、具体的にご記入ください。

(具体的に: )

### Ⅲ その他の制度等について

設問24 次の学校外部との連携事業の中から、活用しているもの・連携をとっているものについて、当てはまるものを

すべてお選びください。(未実施でも予定がある場合は選択してください。)

ア カウンSELING ICT 活用事業 イ 大学との連携(大学生の活用)

ウ 若者サポートステーション エ 子育て支援室等地域行政との連携

オ パートナーティーチャー カ 民間のカウンセラー(進路アドバイザー等)

キ 特になし ク その他( )

設問25 設問24で選択したものについて、活用事例及び成果・課題等について、具体的にご記入ください。

記号: \_\_\_\_\_ (具体的に: )

記号: \_\_\_\_\_ (具体的に: )

設問26 次の学校外部との連携事業の中から、活用している事業をすべてお選びください。

ア 定時制パワーアップ事業 イ 高校生ステップアッププログラム

ウ 特になし ウ その他( )

設問27 設問26で選択したものについて、成果・課題等について、具体的にご記入ください。

記号: \_\_\_\_\_ (具体的に: )

記号: \_\_\_\_\_ (具体的に: )

設問28 学校における外部組織等との連携について、自由にお考えをお書きください。

## 第47回北海道高等学校給食研究協議会

### 北海道大会報告

#### 北海道札幌琴似工業高等学校 教頭 北川 能貴

本年度の第47回北海道高等学校給食研究協議会北海道大会は、8月初頭に全国教頭・副校長会北海道大会が開催されたため、10月に実施しました。また、平日開催で給食調理員のみなさんの参加が望めなかったため、主に給食の管理や運営に関する研修を深めることを目的として実施しました。

#### 1 理事総会・研究協議会

##### (1) 総会提出議題の審議

- ・今後の研究発表担当地区の確認。
- ・役員構成輪番表の確認。

##### (2) 全国高等学校給食研究協議会の状況について

- ・全国組織と北海道との関係について確認。
- ・北海道東北ブロックから山形県が脱退し、本道のみとなったため、ブロック選出全国役員の選定方法等を確認。

#### 2 第47回北海道大会

##### (1) 講演

講師 北海道教育庁学校教育局

健康・体育課学校給食グループ

主幹 本間 美恵子 氏

演題 「高等学校における夜間学校給食の  
管理と運営」

要旨 高校教員にとって夜間学校給食は、定時制に勤務して初めて経験する業務である。今後、給食調製業務の民間委託が進むことから、給食の在り方について整理し、適切な管理・運営をおこなうための諸事項について法的規制から献立の作成、衛生管理やアレルギー対応に至るまで議論を深めた。

##### (2) 研究発表

発表 北海道釧路工業高等学校

教頭 森田 泰史 氏

題 「釧工定給食の課題と今後の取組み」

要旨 生徒の就業率と喫食率に相関が見られることから、夜間学校給食の役割の再確認とより良い給食環境の構築をいかに為すべきかという問題提起をいただいた。

## 退職にあたって

### 北海道函館商業高等学校 教頭 岩出 宏孝

商業科の教員となってあっという間の32年でした。教員としての最後の3年間を定時制でお世話になりました。定時制は初めての経験でしたが毎日玄関で交わす挨拶から生徒達の学校生活は始まります。給食を食べ、授業が始まり、疲れた生徒は熟睡。生徒は様々なものを背負いながら、そのことを克服し通学している姿に頭が下がる思いでした。定時制こそが、教育の原点であることを実感しました。

定時制課程で退職を迎えることができたことに深く感謝しております。ありがとうございました。

## 退職にあたって

### 北海道小樽工業高等学校 教頭 山崎 俊一

教頭を5校13年勤めさせていただき、最初と最後を各2年間、定時制課程で勤務できたことは、私にとってかけがえのない経験であり、宝であります。

いろいろな事情を持ち懸命に頑張っている生徒、第二の人生において更に向学心を高める年輩の生徒に接し我が身を見直す毎日でした。また、教室の暖かい雰囲気や教職員の細かな気配りと熱い情熱・連携で生徒が大きく成長する姿に、定時制教育の必要性を強く感じます。退職にあたり多くの皆様に支えていただき心より感謝申し上げます、挨拶と致します。

## 退職にあたって

### 北海道旭川工業高等学校 教頭 一色 博介

4校で通算14年間定時制にお世話になりました。第2次ベビーブームの昭和63年、札幌工業高校定時制の入学者は4科で157名。私が担任した設備工業科は原級留置者2名を加えた42名でスタート、たいへん賑やかな毎日でした。

多様な生徒が入学する今日の定時制は、当時と比べると大きく様変わりしました。生徒の社会的自立と「生きる力」の育成、そのためにはコミュニケーション能力の向上が大きな課題であると思います。定通教育の益々の発展を祈念し、挨拶とします。

## 平成28年度定通部会 事業計画（案）

### ● 北海道の事業計画

| No. | 事業計画                               | 期日                | 会場          |
|-----|------------------------------------|-------------------|-------------|
| 1   | ◆北海道高等学校教頭・副校長会定通部会理事会<br>総会・研究協議会 | 平成28年<br>5月18日（水） | ホテルライフオーブ札幌 |
| 2   | ◆北海道高等学校定時制通信制体育連盟幹事会              | 5月18日（水）          | ホテルライフオーブ札幌 |
| 3   | ◆北海道高等学校定時制通信制教育振興会総会・<br>研究協議会    | 6月6日（月）           | ホテルライフオーブ札幌 |
| 4   | ◆第47回北海道高等学校給食研究協議会北海道大会           | 8月5日（金）           | 札幌工業高校      |
| 5   | ◆第59回北海道高等学校定時制通信制生徒生活体験<br>発表大会   | 10月12日（水）         | 札幌市教育文化会館   |
| 6   | ◆平成28年度調査研究報告（『会誌』掲載）              | 平成29年<br>3月上旬     |             |

### ● 全国の事業計画

| No. | 事業計画  | 期日                           | 会場                           |
|-----|---|------------------------------|------------------------------|
| 1   | ◆東北・北海道地区高等学校通信制教育研究会<br>校長並びに教頭・副校長研究協議会       | 平成28年<br>5月12日（木）<br>～13日（金） | 秋田県立秋田明徳館高等学校（秋田市）           |
| 2   | ◆全国高等学校定時制通信制教頭・副校長協会<br>第1回全国常任理事研究協議会（全教協理事研） | 6月3日（金）                      | 国立オリンピック記念青少年総合センター<br>（東京都） |
| 3   | ◆第68回全国高等学校通信制教育研究会総会<br>並びに研究協議会（全通研大会）        | 6月16日（木）<br>～17日（金）          | （和歌山市）                       |
| 4   | ◆第67回全国高等学校定時制通信制教頭・副校長協会<br>総会・教育研究協議会（全教協大会）  | 7月28日（木）<br>～29日（金）          | ホテルポールスター札幌（札幌市）             |
| 5   | ◆第67回全国高等学校定時制通信制教育振興会大会<br>（全振大会）              | 8月4日（木）<br>～5日（金）            | （千葉市）                        |
| 6   | ◆全国高等学校給食研究協議会 理事会・総会                           | 8月8日（月）<br>～9日（火）            | 東京都学校給食会館                    |
| 7   | ◆東北・北海道地区高等学校通信制教育研究会総会<br>並びに研究協議会（地区通研大会）     | 10月27日（木）<br>～28日（金）         | 宮城県三田園高等学校（名取市）              |
| 8   | ◆第64回全国高等学校定時制通信制生徒生活体験<br>発表大会                 | 11月20日（日）                    | 六本木ヒルズハリウッドプラザ（東京都）          |
| 9   | ◆全国高等学校定時制通信制教頭・副校長協会<br>第2回全国常任理事研究協議会（全教協理事研） | 12月9日（金）                     | 国立オリンピック記念青少年総合センター<br>（東京都） |
| 10  | ◆東北・北海道地区高等学校通信制教育研究会<br>教頭・副校長研究協議会            | 12月未定                        | 未定                           |

#### 《編集後記》

定通部会における広報部の業務につきましてご理解・ご協力いただきありがとうございます。おかげをもちまして、本年度の「会報」も無事発行の運びとなりました。

編集発行にあたり、校務ご多用の中ご執筆いただきました校長協会定通部会長の宮田校長先生をはじめ、全道の副校長・教頭先生、そしてWEB更新にあたりご協力いただきました、北海道有朋高等学校の諸先生方にあらためて感謝申し上げます、編集終了の挨拶とさせていただきます。  
[ 恵庭南高等学校 深澤 健 ]